

IUIC 7

岩手大学 国際交流センター報告

第7号

岩手大学国際交流センター

2011年12月

目 次

一 論集 一

東日本大震災と留学生 岡崎 正道.....	2
Assessment strategies in e-learning: Formative and summative assessment in a tool-mediated learning environment Mark de Boer.....	13

一 教育部門 業務報告 一

日本語特別コース実施報告	19
日本語研修コース実施概要	24
全学共通教育科目	26
国際交流科目実施報告.....	27
夏季休暇および個別日本語補講報告	29
短期留学生修了研究（個別研究）報告	31
北東北国立3大学外国人留学生合同合宿研修会報告	32
地域日本語教育支援事業報告	34
外国人向け図書館説明会実施報告.....	37

一 国際企画部門他 業務報告 一

岩手大学 UURR プロジェクト報告	38
米国アールラム大学サイスプログラム関連事業報告	42
ヤングリーダーズ国際合宿研修 in IWATE	44
海外留学支援事業	46
英語 ICT コンテンツを活用した教育プラットフォーム開発事業報告.....	49
がんちゃん国際フォーラム開催報告	54
岩手大学外国人留学生スキー研修.....	57
岩手大学留学生実地見学旅行実施報告	58
岩手大学長と岩手大学外国人留学生代表との懇談会記録.....	59
国際交流センターによる大学広報活動報告	60

一 資料 一

国際交流センター組織図	
平成 22 年度留学生関連行事	
外国人留学生集計表	
外国の大学との交流	
平成 22 年度岩手大学海外派遣・留学プログラム一覧	
平成 22 年度海外学生受け入れ・派遣実績	
岩手大学外国人留学生地域派遣実績一覧	

「東日本大震災と留学生」

岡崎 正道

序

2011年3月11日午後2時46分という日付と時刻は、日本人、とりわけ東北地方の岩手・宮城・福島三県に住む人々にとって、おそらく永久に忘れることのできないものとして記憶されることになるであろう。この時間に宮城県沖合を震源とするマグニチュード9.0という超巨大地震が、突然襲いかかった。私はその時岩手大学の構内にいたが、震動の強さとともに揺れ続ける時間の長さに、これまでの地震とはかなり違うものを感じた。以下、この大震災に直面して私と岩手大学の留学生たちが味わった思いや経験したこと、そして実践した活動等について、概ね時間の経過に沿って叙述し、また考察を加えていきたい。

1.

1978年6月、東北大学の大学院生として仙台にいた頃、宮城県沖地震を体験した。この時はしばらくの間停電と断水が続き、公園の水道からポリ容器に水を汲んで運ぶような作業もした。また2003年の5月には東北地方の内陸部に大きな被害をもたらした地震に遭い、岩手大学の自分の研究室（6階建の最上階）は書物やビデオテープなどが大量に落ちて散乱し、片づけるのに丸三日を要するという経験も味わった。あの時の研究室の「惨状」を写した写真もあり、学生たちにも時折見せている。

今回の地震では、自分の研究室は半年前に耐震工事を施した新築同様の建物（3階建）の2階に移転していたお陰で、ほとんど無傷で済んだ（書物やビデオテープなどが棚から落ちて散らばったが、3時間程度で片づけることができた）。耐震工事の必要性はつとに指摘されているが、こうして大地震を体験してみるとそのことが実感できる。巨大地震（盛岡は震度5強）ではあったが、私の研究室に限っては、2階という比較的低い階だったことも手伝って、大したことにはならず済んだ。

それでも外では（半年前まで私の研究室があった）隣の建物から大勢の教官や学生などが飛び出してきた騒ぎ始めたのが聞こえたとし、留学生たちも続々集まってきた。地震発生の瞬間にどこで何をしていたかは勿論様々であるが、皆一様に驚き、かつ脅えた顔つきであった。

留学生たちの出身国は中国・韓国・モンゴル・ベトナム・タイ・マレーシア・ミャンマー・ロシア・フランス・アメリカなど多岐にわたるが、地震を全く経験したことがないという者も少なくない。「地震国」日本に住む日本人であれば、これまで一度も地震の揺れを感じたことがないなどという人間はおそらく存在しないと思われるが、外国だと地形や地盤などの関係でおよそ地震があり得ないということも珍しくはないようである。したがって生まれてこのかた、大地が揺れる、その上に自分が立っているなどという経験は全然したことがない、そもそもそんなことが起こるといって自体を信じられないという留学生も決して稀ではないのである。（注1）

ロシア人の大柄な女子学生など目に涙さえ浮かべ、すっかり脅えきっていた。3年前前の四川省大地震や（歴史の知識として）1976年の唐山大地震（死者25万人とという）などを知る一部の中国人学生は幾分落ち着いているように見えた—あくまで「見ええた」だけで、内心は彼らとて決して穏やかではなかったろう—が、大部分の留学生は、大変な事態が生じたという恐怖と不安を表情に浮かべていた。私は自宅の状態も気がかりではあったが、その時間家族（妻と娘）は不在であることがわかっていたので、あえて家に電話はしなかった（仮に家に誰かいたとしても通じなかったであろう。携帯電話には通じなかった）。その日は夕方5時から「卒業留学生送別祝賀会」が学内の生協食堂で

の生協食堂で催されることになっていたが、到底開催できる状況ではなく中止となった。そのうちに停電となり、やがて水道も出なくなった。盛岡市内はその日の夜ほとんどのところが停電し、再び電気が通るまでに2～3日を要することとなる。

幸い私の自宅ではコップ（数個）や立てかけてあった鏡がひっくり返って割れたといった程度で、格別損害というほどのことは何もなかったのだが、同夜から2日間停電がつづきが続き、その間はラジオ付き懐中電灯やろうソクの世話になった。自宅から何人かに留学生に電話をしてみたが、誰にも通じなかった。ラジオでは沿岸部が大津波に襲われ相当の被害が生じているらしいことや、福島県の東京電力福島第一原子力発電所（以後、「東電」発）や「原発」などと略記）で事故が発生したらしいことなどを報じていた。しかしこの時点では、津波による被害があれほど無惨なものであることも、また原発事故の影響がかくも深刻化することも予想していなかった。

2.

地震の翌日（3月12日）は土曜日であったが、私は9時頃大学に出てきた。土曜や日曜でも私は研究室に「出勤」してきていることが少なくないが、この時はとにかく留学生たちの様子が気がかかり、自宅にいる気持ちにはなれなかった。幸い自宅は何の被害もないに等しかったので、まずは留学生たちがどういうことになっているかを確認しようと思った。留学生を指導する立場にある身として当然と言えば当然なのだが、こういう時にこそ彼らの傍らに寄り添い、少しでも力になってやらねばという思いが募った。

私は留学生たちが避難する公民館や市立体育館、そして彼らの元々の居所である留学生会館等を頻りに駆け回り、不安や疑問に答えつつ彼らをなだめたり励ましたりした。盛岡周辺は震動はかなり強かったものの、建築物が崩落したり壁面にひび割れが生じるといったこともほとんど見られなかった。この地震で特に被害を受けた、損害を被ったという印象はなかったのだが、それでも停電・断水のため自宅・自室で生活ができないという人は少なくなかった。そういう市民たちが市内の指定された避難所に移ってきたのであるが、その中に岩手大学の留学生たちも多数混じっていた。上田地区（岩手大学の近辺）では、上田公民館および盛岡市立体育館が避難所になっていた。岩手大学構内にある国際交流会館（留学生会館）に居住の約30名、大学の周辺のアパートや学生寮などに住んでいる留学生数十名、これらの留学生たちが震災の翌日の3月12日から13日にかけて、この2ヶ所に手荷物を持って集まってきた。

地震から一晩過ぎていることもあって、彼らは幾らか落ち着きを取り戻してはいたようだったが、それにしても「いやはや、とんでもないことになった」という当惑の表情は見てとれた。とりあえずレトルトのご飯やバナナ、パンなどの食物を与えられて皆一息ついた。

翌日からはテレビも視聴できるようになり、ロビーのテレビ画面を食い入るように見た。流される映像は、各地の津波の凄まじさと破壊された沿岸地域の状況。それとともに、福島原発の事故についてのニュースも少しずつ報じられるようになってきた。留学生たちは専門分野はいろいろ異なるが、原発事故→放射能汚染という連想は当然誰にでも働く。一緒に見ていた私に対して原発事故に関する質問を投げかける者もいたが、その時点では詳細が十分わからなかった（今現在でも不明な点は少なくない）こともあって、満足のいく回答はなし得なかった。しかし、これはただならぬことが生じた、この先一体どういふことになるのだろうかという不安は誰もが抱いたことは間違いないと思われる。（注2）

3.

さて13日には電気や水道も何とか復旧し、留学生たちもほぼ全員が自分の住まいに戻ることができた。私は国際交流会館などに戻った後の彼らの生活も気がかかりだったので、そちらへも足を運んだ。す

ると少なからぬ留学生たちが、帰国の準備にかかっているという。いろいろ聞いてみると、中国やフランスなど、早く日本を離れるように大使館などから指示を受けたところもあったとのことだった。

しかし盛岡は地震によるダメージはほとんどなく、内陸部であるから津波の影響はあり得ない。にもかかわらず、盛岡在の留学生も逃げ出すというのは、明らかに原発・放射能による被害を懸念してのことに違いない。

外国に在留する国民の安全を守るのはどの国でも在外公館の重要な責務であるし、放射能汚染は人体に重大な被害をもたらしかねない災害なのだから、各国の公館が神経質になるのもわからないわけではない。だがそれにしても、国内に数多の原発を建設して発電の相当割合を原子力に頼っているフランスや、国内でしばしば核実験を繰り返してきた中国などに、そういうことを言ってもらいたくないという思いも募った。

私は、すぐにでも盛岡を離れようと焦っている留学生たちに対し、説明と説得を試みた。この日（震災から4日目）大学側の説明会が開かれたようだったが、留学生たちの（特に放射能被害についての）不安・懸念の声に対する満足はいく説明・回答はなされなかったという。「あの程度の説明では全然安心できませんよ」と不満げに言う者もいた。ここはやはり私ができる限りの説明と彼らに対する説得を施すべきであろうと強く思った。そこで国際交流会館の集会室に屯ろしていた留学生たち（30名ぐらいのように記憶する）に声をかけ、めいめいの本心を聞くように努めた。母国の親が、すぐに帰ってきなさいと言っている」「大使館から強く避難を勧められたので・・・」「本当はこのまま盛岡に留まりたいんだけど・・・」「金もかかるし、面倒くさい。でも、やはり怖い・・・」etc. いろいろな声があった。私はこうした声に真摯に耳を傾け、できるだけ多くの学生に答えようとした。この時の国際交流会館、翌日大学の別の場所で、あるいは私の研究室を訪ねてきて胸の内を訴えた者も何人かいた。それぞれ事情は異なる面もあったが、おおかたは原発事故の影響をかなり過剰に恐れての、いわば「放射能パニック」とでも呼ぶべきものだった。

私は留学生への日本語・日本事情指導を本業としているが、元々の専門分野は日本思想史、特に幕末から近代の政治史・政治思想史を研究対象としている。自然科学の方面は苦手で、原発・放射能の問題などは（以前から関心があり、大学時代は反原発運動などに多少の関わりも有したが）全くの門外漢である。科学的な根拠を明示しての解説などはもとよりでき得るはずもないが、それでも福島原発から300キロ近く離れている盛岡の地に放射能の被害が及ぶとは考えにくい、それぐらいのことは直感的に思った。テレビ等の報道では政府関係者や様々な「専門家」が登場し、「ただちに健康に影響はない」と馬鹿の一つ覚えのごとくに繰り返して、かえって国民の不安をかき立てるといふ愚を犯していた。否8月中旬の現在でもなお、政府の発表（「大本営発表」とも批判される）や専門家（「御用学者」と揶揄されたりもする）のコメントなど本当に信じ得るものかどうか、まだ何か重大な情報を隠しているのではないか、あるいはさらに言えば、そもそも真実が誰にも十分にはわかっていないのではないか、そうした疑念を拭き切れないのだが、反面やたらにパニック状態になるような過剰反応も、これまた如何なものかと思う。

ともあれこの時は、まず落ち着いて冷静に情報をキャッチし、総合的に判断して対応を慎重に決すべきこと。少なくとも盛岡の空から放射線が地上に降り注ぐなどということは、まず考えられない。一方面からの情報や警告だけに反応して右往左往しないように。そういったことを努めて穏やかに説き、なるべく帰国は思いとどまるようにと留学生たちを説得したのだが、しかしダメであった。

「君らは心配だから自分の国へ帰るといふが、私たち日本人は他にどこへも逃げるところがないんだよ！」とも言った。「だから、我々日本人と一緒に安心して盛岡に留まってほしい」という含意だったのだが、「先生もどこか外国へ逃げたいんですか？」と誤解して受け取られ、思わず苦笑する場面もあった。

4.

結局私などの「説得」もほとんど奏功せず、大半の留学生が3月15日～20日ぐらいの間に、まさに蜘蛛の子を散らすように帰国してしまった。中国人やフランス人ばかりではない。韓国・モンゴル・タイ・ミャンマー・ベトナム・マレーシア・インドネシア・バングラデシュ・キルギス・ロシア・アメリカ・etc. とにかく在籍するほとんど全ての国の留学生が、一目散に逃げ帰って行った。元々この3月で卒業・修了し盛岡を離れることになっていた学生は当然としても、そうではない留学生即ち所謂「在校生」までが我先にと帰国の途に就いたのは異常とも言うべき事態だった。卒業式中止に続き新年度の入学式も取り止め、さらに4月上旬に予定されていた新学期の開講も1ヶ月遅らせて連休明けの5月9日とすることが震災の直後に大学の方針として決定され、春休みが2ヶ月間に及ぶということが知らされたため「折角の長期間の休みを利用して帰省しよう」という気持ちを多くの学生が抱いたのも確かであろうが、それにしても4分の3あるいはそれ以上の数の留学生が日本を離れるというのは、全く普通ではない状況であった。

今でもあの時のことを思い起こすと、皆が平常心を失って狼狽の極みにあったというほかはない。たとえば良くないかもしれないが、1945年8月満州へなだれ込んだソ連軍の前に大混乱となり、取るものもとりあえず逃げ惑った在満日本人たちの姿を彷彿させるような光景だったかもしれない。かくして3月中旬から1ヶ月ぐらいの間のキャンパスは、日本人学生もほとんどいなくなったこともあって、まさに火が消えたような寂しさであった。

この時期の盛岡は、電気・ガス・水道などライフラインは一応回復したものの、石油関係の供給はなかなかされず、車に給油できないためあまり走らせることができず、バス路線もしばらくはストップということで外出を控えなければならなかった。私事ではあるが、まだ3月の寒い季節であったにもかかわらず、灯油も配達頼めず、暖房も極力抑制せざるを得なかった。食料は数日間は買いおきの物で食いつなぎ、近所の店が再開すると早朝から並んでまとめ買いを繰り返した。やがてスタンドも営業はするようになったが、一人20リッターまでという具合に制限された給油を行なうために3時間ぐらい車列に並ばねばならないあり様であった。よい機会だと考えて、自宅から大学まで約7キロの道のりを徒歩や自転車で通勤してもみた。

津波で家を流され、家族も行方不明といった大勢の被災者の方々の苦難と悲痛を思えば、これぐらいの不自由さなど物の数にも入らないわけで、さほど辛い気持ちにもならなかったが、この程度の「不便」さも3月末頃にはほぼ解消され、いつもの生活を取り戻した。だがこんな「物の数にも入らない」程度の不自由さでも、普段我々がどれほど便利で快適な生活に慣らされて、自らの手で何か工夫を凝らしたり欲しいものを我慢したりして暮らすのを忘れてしまっているかということ、少しばかりだが思い出させてくれたような気がする。

5.

留学生たちの中には僅かながら、帰国せず盛岡に留まった者もいた。私の「説得」に従ったのかどうかわからぬが、原発・放射能を極端には恐れず冷静さを保った者、研究の途中で帰国はできないという者、本当は帰りたいが金がないのでそれが叶わないという者など、事情・理由は異なるが、3～4月の間ずっと盛岡で生活を続けた留学生も存在したわけである。私は、その留学生たちに呼びかけて何かできないものかと考えた。多少の「物不足」などに見舞われたとはいえ、盛岡はこれといった被害もなく、3月の終わり頃にはほぼ平常通りの生活を回復することができた。三陸沿岸の被災地のあまりにも無惨な様況をテレビの映像で目にするにつけても、無事だった我々が何もせず安閑としていることはほとんど罪悪に等しいと思わずにいられなかった。

私は普段から大学の本業の傍ら、国際交流、地域づくり・町づくり、教育・福祉といった諸方面のN

PO団体や個人（その職業は実に千差万別）と関係を持ち、様々な活動に関わってきている。多くの県議・市議（それに少数だが国会議員も）など政治家との付き合いもある。そうした数多の人々との親交を通じてたくさんの実践に携わり、また自ら企画運営にも当たってきた。（注3）これらの幾多の実践と多種多様な人々との関わりは、私でなければおそくなし得ないことであると強く自負しているが、今回の大震災のような「非常時」にこそ、これらが大いに活かされるべきであろう。折しも（株）邑計画事務所の寺井良夫社長が代表となって救援団体SAVE IWATEが設立されたことを知り、これに加わる（協力する）ことにした。（注4）寺井氏が事務局長を務めるNPO法人「もりおか中津川の会」という団体が数年前に結成され、私もそこで理事の一人となっていて、彼とは浅からぬ親交がある。（注5）その寺井氏が中心となり、さらに理事や顧問として名を連ねた面々にも私と付き合いのある人が多かったため、私も当然メンバーとなることを期待されていたようだった。

まず3月30日にSAVE IWATEの事務所（盛岡市内の旧番屋＝消防団施設）に顔を出し、次いで4月2日に開かれた総会に盛岡に残っていた留学生数名（中国・ベトナム）を伴って出席した。彼らはその場でボランティア登録を行ない、後日加わった者とともにボランティア支援活動にも携わることになる。この総会でいろいろな報告がなされるのを聞いて、私も留学生たちも「何はさておき、まず一度被災地を自分の目で実見しなければいけない」と強く感じた。そこで早速翌4月3日に中国人学生4名を私の車に乗せて、沿岸の被災地を視察に出かけた。

私自身初めての被災地入りだったが、意外に道路は混んでいなかった。（注6）救援団体や自衛隊などのベース基地となっている遠野市を通り、仙人峠を越えてまず釜石へ入った。山間部から釜石の町に入ったため、しばらくの間津波の被害らしい痕跡は全然見られなかった。「ええ？ どこが津波被害の跡なの？」そう言いたくなるほど、町中は整然としていた。「ニュースでは随分大げさに大災害だと言っているが、それほどひどいことはないのかもしれない」そんな思いは、釜石市の海岸部に近づくにつれて一掃された。道路の両側にもものすごい量の瓦礫の山、また川の中につぶれた車が数え切れないほど流されてきていた。倒壊した家や店舗などは数知れず、明らかに大津波が押し寄せて破壊の限りを尽くしたことを物語っていた。信号機はどこも止まっており、警察官が交通整理に当たっていた。自衛隊の車は遠野から釜石にかけてたくさん走っているのを見たが、市内では隊員たちが忙しく動き回っていた。

同乗していた中国人学生たちも、さすがに衝撃を受けた様子であった。釜石に着くまでは車中で賑やかに談笑していたが、凄まじい破壊の状況を目にすると次第に声も小さくなり、窓越しに食い入るように見つめていた。彼らは持ってきたカメラで、何枚も写真を撮影した。二人の学生が撮った計300枚以上にも及ぶ写真は、その後私が国内外のいろいろなところへ被災地の現況を知らせるために利用させてもらった。1・2階が津波でぐちゃぐちゃになった建物、2階部分が1階部分を押し潰しそこへ乗用車が突っ込んだ状態の家、骨組みだけ残してほかの部分は完全に流されてしまった店舗、港から流されてきて道路の真ん中でんと座った大きな船、高い木の中ほどにぶら下がった自転車、土台のコンクリートと鉄骨だけであとは全部どこかへ行ってしまったビル、そして津波に加えて火災で焦げ爛れた姿の家屋とビル・・・到底言葉では表現しきれない無惨な様々な光景が、そこには写し出されていた。

この日は釜石から南下して旧三陸町、越喜来地区、大船渡、陸前高田、さらに宮城県にまで足を伸ばして気仙沼へも赴いた。気仙沼では、（新聞にも大きく掲載された）赤と青の船体の巨大な船が町の中央部に流されてきているところも見た。道路は水と油が混じり合ったような液体が流れ、周辺一帯は膨大な量の瓦礫の山だった。海岸部まで行こうと思ったが、警備・交通整理にあたった自衛隊員に制止された。その日朝8時に盛岡を出たのだが、帰ってきたのは夜7時半頃になっていた。

6.

この日の視察の様子はSAVE IWATEの中心メンバーにも報告し、また同行しなかった留学生や

日本人学生の何人かにも話して聞かせた。中国・モンゴル・ミャンマーなどの留学生がボランティア活動への参加を申し出、私は早速SAVE IWATEに登録させた。あるモンゴル人学生（仲間から「横綱」というニックネームで呼ばれる力自慢）など、一人で三人分の力仕事をこなして大いに感謝された。

3日に現地視察をした留学生などから、「是非被災者のために何か役に立つ活動をしたい」という声が上がった。私はまず関係深い団体の一つである「地球市民の会」の渡辺充行代表に諮り、被災地・宮古市内の小百合幼稚園に留学生とともに慰問に赴くことにした。渡辺氏のもとには、彼が関係する「財団法人・自然公園財団」から、今回の震災被災者のために製造したという大量の「さくらキャンディ」が届いていた。それらを被災地の子どもたちに贈り、ささやかながら喜びとしてもらいたいと考えた。

4月21日、この申し出に応じた宮古市の小百合幼稚園（加藤敏子園長、園児110人）へウイグル・ベトナム・モンゴル・バングラデシュの6名の留学生とで慰問に訪れた。十数年前からの知己で宮古市の教育委員長を務めたこともある平井二三子さんもこの趣旨に賛同し協力してくれた。

この日登園していた100名ほどの園児たちは思ったより活発で屈託なげに見えたが、園長に聞くと、この幼稚園は被害は少ないほうだが、それでも園児の一人が犠牲になったほか、親を亡くした子が何名かおり、また家を失って避難所暮らしという園児もいるということであった。そう言われてみれば、元気いっぱい振舞う子どもたちの中に、やや暗い表情の子やうつむき加減の子どもも少なからずいたような気もする。正味1時間程度の滞在だったが、さくらキャンディを全員にプレゼントし、ウイグルの男女の留学生が民族の踊りを披露した。岩手日報やNHKの記者も取材に訪れ、午後は同市の磯鶏（そけい）地区の被災現地で留学生たちが感想を述べる場面を撮影した。なお、私の東北大学時代の後輩で現在広島市の修道高等学校教員である竹川誠氏より、大量の図書、傘、シャツ、長靴、毛布などの支援物資が送られてきていたが、この日平井氏の導きで宮古市教育委員会に小学生向けの図書（段ボール6箱分）を寄託した（その図書は、後日被災した小学校へ贈られたという）。

とりあえず被災者支援らしい活動の一つやり遂げて、いささかの満足感を味わうことができたのであるが、これを弾みにさらなる活動へという意欲が湧きおこってきた。SAVE IWATEの寺井代表らとも「留学生たちの協力を得て、被災地で外国料理の炊出し（被災者への提供）を実施したい」という話は交わしていたが、現地へ乗り込むとなるといろいろ準備が大変であり、また料理提供ということゆえ衛生面の配慮など気を使わねばならないことも多い。そこで提起されたのが、盛岡に避難してきている被災者の皆さんに諸民族の料理を振舞おう、という案だった。

まず4月24日、もりおかふれあいランドで避難生活をおくる100名ほどの方々に対し、モンゴル人留学生たちがお国自慢の料理を作って提供した。（注7）この活動には、私は当日会場に赴いて留学生たちにねぎらいの言葉をかける程度に関わりしかできなかったが、「盛岡周辺に避難してきている被災者への外国料理の提供」という、留学生たちの最も得意とする活動の実例として大いに参考となるものであった。

7.

私が音頭をとっての留学生たちによる「被災者支援・民族料理提供」は、4月30日が始まりであった。盛岡市の繋温泉にあるホテル愛真館には、被災地の釜石市と大槌町から250名ほどの被災者が移ってきて避難生活をしていると聞いていた。かねてより懇意の県議会議員（注10）の紹介により愛真館の菊地善雄社長とお会いして協議し、避難生活者の皆さんに中国の水ギョーザなどの料理を食べていただくという話が決まった。

岩手大学の留学生数は170名ほどで、そのうち100名前後が中国人－漢民族のみならずウイグル族・朝鮮族・モンゴル族・満州族などもある－だが、前述のようにそのうちの4分の3くらいが震災直後に一時帰国してしまっていた。中国人以外の者も含め、これらの帰国中の留学生たちが岩手大学に戻

って来てくれるかどうか大いに心配されたのだが、幸い4月の下旬から5月の初めにかけてほぼ全員が戻り、新入学の留学生も一部を除いて予定通り入ってきた。その中国人学生たちの大半が4月末の時点で揃っており、30日の愛真館には30名余の中国留学生たちが結集した。

愛真館など指定された盛岡市内のホテルでは、一般の宿泊客を断って被災者を滞留させていた（もっとも震災の影響で一般客のキャンセルも続出してはいたのだが）。県のほうから被災者1名につき1日5000円ほどの補助金が出されていたが、この金額は通常の宿泊料金の3分の1程度でしかなく、したがって毎日提供される食事はそれなりのレベルのものとならざるを得ない。「(連日おにぎりやパンにカップ麺など)避難所暮らしの食事に比べれば、贅沢は言えない」とは言いながらも、やはりたまには珍しい物も口にしたいというのが人情ではあるであろう。

この日の料理提供は成功だったと言えるだろう。朝10時に愛真館のバスが大学に迎えに来て留学生たちが乗り込み、ホテルに着くや直ちに調理作業にかかった。200人以上の料理、ギョーザ1200個（およびスープやなど）を皮から手づくりという、彼らのガーデンパーティや大学祭、屋台村などで行なういつもの手順である。途中の休憩をはさんで夕方までかかって料理は完成し、5時から7時半頃までの夕食でそれらは出された。日本ではあまり作られない水ギョーザを皆さん喜び、お代わりを求める人も少なくなかった。8時過ぎにホテルを後にしたが、学生たちの顔には被災者たちに喜んでもらったという満足感が浮かんでいた。この活動は新聞でも報じられたが、岩手日報（5月1日付）の記事の見出しは「ギョーザ作り留学生恩返し」となっていた。すなわち岩手大学中国留学生学友会の会長の談話「2008年の中国四川大地震で、日本人にお世話になった。その恩返しをしたかった」が、彼ら中国人たちの素直な気持ちを言い表していたと思われる。またこの活動の成功は、私にもある種の自信を与えてくれた。是非他の国・民族の料理もふるまいたいという思いが募った。

次はウイグルであった。岩手大学には10年ほど前からウイグル人留学生がかなりまとまって入学するようになり、今では15、6名が在籍している。彼らは特に他の中国人（漢民族）学生といがみ合っているわけではないが、独自の文化を有することもあって、料理屋台を出店するようなイベントではいつも独立したブースに店を構える。この話はすぐにまとめ、6月5日にやはりホテル愛真館で料理を振舞うこととなった。そして前日から盛岡入りした東京からのお手伝いの面々と岩手大学のウイグル人学生らと協働で、ウイグル料理（ポロ・シシカバブ・サラダなど）をこしらえて食事に供し、また食後にはウイグルの伝統的舞踏なども披露した上、ウイグル人の帽子を50個もプレゼントに及んだ。避難生活者の皆さんの喜びようは、4月30日を上回るものがあった。

さすがに愛真館での料理提供はこれでおしまいと思っていたら、今度はベトナム人学生が「我々もやりたい」と言ってきた。岩手大学にはベトナム人学生が10人ほどいるが、そのほとんどが市内の盛岡情報ビジネス専門学校・日本語学科という岩手県唯一の日本語学校の出身者で、何かのイベントの際ベトナムの屋台などはたいていこの日本語学校のベトナム人生徒と岩手大のベトナム人学生（両者は先輩・後輩の関係となる）の協働で運営されることが多い。今回の愛真館での活動も両者が協力して行なうというのである。私は例によって高橋県議と連絡を取り、6月26日にベトナム料理提供を行なった。この日は繋温泉の近くで「東日本大震災復興祈念植樹&タイムカプセル」が催されており、留学生たちはこれにも全員で出席した。

なお愛真館で生活していた被災者たちは、7月10日頃に同ホテルを去って故郷の仮設住宅などに移って行った。あの方々は今どんな気持ちで、どういう生活を送っておられるのか？ またいつかお会いしてみたいものである。

8.

留学生たちによる支援活動は、ホテル愛真館での料理提供だけではない。これらと前後して私は再び

「地球市民の会」の渡辺代表と語り、2つの活動を計画した。6月9日の大槌町・小槌神社訪問と、6月23日の宮古小学校訪問である。前者は、渡辺代表の友人である村上保氏の紹介により、大槌町の被災者20名余が避難生活をしているという小槌神社に中国留学生6名を連れて行き、水ギョーザなどの中華料理を振舞ったものである。大槌町は地震と津波に加えて激しい火災も起こり、町の大半が灰燼に帰した。話には聞き写真等も見てはいたが、実際に行ってみると、その被害の物凄さはまさに言語を絶するほどであった。とにかく、町の中は見渡す限り、瓦礫の山と骨組みだけ残して無惨に焼けただれた建物ばかり。猛爆撃を受けて壊滅した後のような有様であった。陸前高田もそうだったが、この町もまさしく焼け野原そのものと言ってよい惨状を呈していた。

その中で町内の小槌神社だけは奇跡的に津波を免れ、火事も神社のすぐ裏手の森までは火の手が及んだものの、神社は類焼を被らずに済んだ。やや高い土地に建てられていたお陰とはいえ、これは文字通り神がかり的な奇跡かと思われることであった。神社内には、松橋知之宮司とその家族に加え20名ほどの町民が生活していた。中国人学生たちは厨房を借りて調理にかかり、短時間で水ギョーザなどを作り上げた。料理は避難生活者のほか、近辺で活動していた自衛隊員や遠く四国の香川から応援に来ていた常井力氏（元高校教師で陸上競技の記録保持者）らにも振舞われた。また先に述べた、広島からの救援物資の長靴を皆さんにお渡しした。（傘やシャツは大船渡の「さんさんの会」へ贈った）昼食に出したそれらの料理は大変好評だったが、食後一休みしていたところへ大槌町の住民30名ほどと町会議員数名が集まって来て、何やら集会が始まった。議題は大きな被害を受けた大槌町の現状分析と復興へ向けた今後の方針に関することだったが、やや激しい剣幕で町議に食い下がる町民もいて、この町の再建の困難さを窺わせた。勿論部外者である私は、部屋の隅のほうでただ黙って聞いていた（この日の活動の様子は、岩手日報に掲載された）。

次いで6月23日には、渡辺代表のほか、これまた私の親交ある石川明氏と浅沼隆彦氏の協力を得て、留学生7名（ロシア・フランス・タイ・モンゴル・ウイグル）を宮古小学校へ伴った。目的は、この小学校の要請で校庭の花壇に植栽を行なうことと留学生と生徒たちの交流会である。

相模貞一校長ら教員と200名余の生徒に迎えられて、これらの活動は和やかかつ賑やかに行なわれた。比較的被害は少なかった学校であるが、それでも当日はグラウンドが水に浸かり、校長らは生徒の安全を確保するのに大わらわだっただけで、生徒たちは総じて明るく、あまり屈託は感じられなかった。留学生はそれぞれの母国の様子をパワーポイントや写真等を使って説明したり、民族の踊りや器楽（モンゴルの馬頭琴）を披露したりした。この日の活動の様子を撮影した写真を相模校長が早速パソコンでプリントし、我々に渡してくれた。この時も、先述の平井二三子氏（元宮古市教育委員長）が同行してくれた。

9.

これまで縷々書き綴ってきたような活動を通じ、留学生たちは多くのことを学んだに相違ない。教室内の机上の学習では決して得られない貴重な体験の累積が、彼らの大きな財産として今後きっと活かされていくであろう。私はそうした活動の仲立ちをしたわけであるが、私自身も大きなものを得たように思っている。一つ一つの活動はささやかなものであっても、それらが積み重なれば大きな収穫となるであろう。

前にも述べたが、大事なものは理屈や形式や体裁ではない。実践の主体たる個々人の魂と行動力である。百の議論千の理屈より、一つの実践！ そのことを改めて痛感させられた、この3ヶ月であった。

私はこうした留学生たちの支援活動のあれこれを、マスコミやインターネット等を通じて多くの人々に知らせようと努めた。SAVE IWATEのメンバーが3日間かけて被災地（宮古から陸前高田まで諸方面）で撮影してきた動画を、国内外のいろいろな人々へ送信もした。またあちこちから依頼されて、

講演等も行なった。5月23日、(株)メルクの重石桂司社長主催のメルク会で「維新、敗戦そして震災」と題する講演。6月16日には、盛岡青年会議所のイベント「守ろう岩手！ 夢・希望・未来」に留学生17名（中国・ロシア・キルギス・モンゴル・タイ・ミャンマー）とともに出席し、私も短時間の講演を行なった。地元紙の岩手日報に毎日掲載される、「日報論壇」という読者の意見寄稿のコーナーがあり、私の論説も過去に20回ぐらい掲載されているが、7月27日付の同欄に「被災地応援する留学生」と題する拙論が載った。それは、この論考に叙述してきた事柄をコンパクトに1000字ほどに要約した内容である。

6月18日には岩手大学構内の国際交流会館で、恒例の「留学生と市民のガーデンパーティ」を開催した。例年のごとく中国・ウイグル・韓国・モンゴル・ベトナム・マレーシア・インドネシア・フランスといった国々が料理屋台を並べ、民族舞踊などが賑やかに披露されたが、今回は被災地の釜石・大槌から生徒20名余も招待された。8月6日の「アジアの屋台村&外国人のど自慢大会」も恒例行事であるが、今回は震災を意識して行なわれ、またこれと同様の「世界の屋台村」（盛岡国際交流協会・岩手大学共催）が9月10日に被災地の山田町で催されることになっている。

海外からの支援の申し出等もある。2004年12月のインド洋大地震・津波で大きな被害を受けたスマトラ島のアチェ地方の子どもたち（親を亡くした遺児たち）約60名に教育資金を提供する「岩手・アチェ奨学金」を、あの時集めた義援金などを原資として設立し、今もそれが継続しているが、この活動に関わったインドネシアの元留学生が東日本大震災の救援のためとして募金した金を送ってくれた。今後その使途を考えていくことになる。9月15日～24日に私はロシアを訪れ、昨年続きサンクトペテルブルク国立文化芸術大学（1997年より岩手大学と交流あり）で「東日本大震災と日本人」「平泉世界遺産と岩手」と題する2つの講演をしていくことになっているが、その際ロシアで大震災被災者支援の募金が行なわれているということなので、そのことについても協議してくるつもりである。

岩手大学に在籍するモンゴル人留学生のテムジン君は「チンギスハンの黒馬ーモンゴル伝統文化・馬頭琴コンサート」を企画し、モンゴルのプロ馬頭琴団体を招聘して盛岡・東京・長野・名古屋などで9月に公演を行なう。その収益の大半は、震災で親を失った子どもたちに贈るという。私は彼の志に感じ入り、これに協力し支えている。また11月10日には、中国江蘇省演芸集団による「加油日本！東日本大震災支援チャリティ岩手公演」が計画されている。これは中国の伝統演芸である、京劇・器楽・歌舞・雑技などをまとめて鑑賞させるという大がかりなもので、こちらも収益は義援金となる。私も実行委員を務めているが、中国人留学生たちにも関わってもらう予定である。さらに、これら以外にもいろいろな催しが今後企画されていくことであろう。私は、この10月に新入学する者も含めた留学生たちに、できるだけ多くの活動の場を与えていきたいと念じている。その際、何よりも私自身が実際に知恵を絞り、汗をかくことは言うまでもないことである。

結

「人間僅か五十年・・・何か腹のいえるようなことを遣って死なねば、成仏は出来ぬぞ」（注8）これは吉田松陰が門弟（品川弥二郎）に向かって言い放った言葉である。三十年の短命の生涯を決死の捨身的実践躬行の連続で駆け抜けた松陰ならではの、非常に重みのある言である。私は吉田松陰を敬愛し研究テーマともしてきたが、彼の足元にも及ばぬ凡人であり俗物にすぎない。かつ年齢も50歳を越えたが、まだ「成仏」もしたくない。それでも「何か腹のいえるようなこと」をやりたいという思いは、常に持ち続けているつもりである。平凡な日常が大きく揺らぐような非常時にこそ、人間の真価は問われるのかもしれない。本論で述べてきた実践活動は実にささやかで、全く取るに足りない行ないであるに違いないが、ともかくも精一杯の行ないではある。

東日本大震災は、2万人以上にのぼる尊い犠牲者と莫大な経済的損失をもたらした。そして仮設住宅

などが建設され大半の被災者がそこに移ったとはいえ、本格的復興・再生はまだこれからである。今後2年3年、否5年10年にもわたる息の長い支援が必要とされることは確実である。縁あって日本それも被災地岩手に留学してきた（あるいはこれから来る）外国人学生たちにも、是非ともこの悲劇の現実を認識し、活動に参画してもらいたい。そのための橋渡しをすることが私に与えられた大きな役割であろうと思っている。

- (注1) 2004年12月に発生した「インド洋大地震・津波」では、インドネシアを中心にタイ・スリランカ・バングラデシュなどに大きな被害が生じ、多数の犠牲者を生み出したが、それでもマレーシアではほとんど揺れはなく、それゆえマレーシアから来ている留学生たちの多くは（無論あの時の大地震・津波災害の事実は知っているが）地震に遭遇した経験はない、と答えている。
- (注2) 私は福島市の北東にある梁川町（現伊達市）の生まれだが、父親の転勤で何度か転校させられた。小学校1年の入学は梁川町だったが、2年生に市の小学校に移り、翌年今度は福島県の沿岸部（浜通り地方と呼ばれる）の原町市の小学校に転校した。すなわち小学1年・2年・3年が全部違う学校という、稀有な体験をしたわけである。この原町市が数年前近隣の町と合併して誕生したのが、すっかり有名になってしまった南相馬市である。原町から30キロほど南の双葉町に、問題の「東京電力福島第一原発」が存在する。両親も既に死に親戚ともほとんど没交渉となっているゆえ、福島とは今は無縁に近くなっているが、それでも自分の生まれ故郷がこうした災難に見舞われて苦悩しているのを見聞きするのは、勿論決して愉快なことではない。原町第一小学校時代のクラス担任だった佐藤敏夫先生とは卒業後も時々電話や手紙をやり取りする関係が続けてきたが、震災後はしばらく連絡が取れずやきもきした。4月中頃になって漸く電話が通じ、その後3度ばかり電話でいろいろな話をする事ができた。原町市内は一時まるでゴーストタウンみたいな状態にもなったが、その後徐々に住民が戻り、幾分落ち着きを取り戻している。但し原発から20～30キロ圏で誰しも不安は隠せず、将来を案じる人も多い。伝統の相馬野馬追祭りは、今年は事実上中止のやむなきに至るであろう・・・と。
- (注3) そうした実践の数々については、昨年の岩手大学国際交流センター報告第6号所収の論考「国際交流と国際理解－これまでの幾多の実践を通して－」に詳述している。こうした多くの実践、多彩な人々－その中には、自民党から共産党まで各党派の政治家も含まれる－との親交が私の掛け替えのない財産であり、それが留学生たちにも少なからざる益をもたらしていることを、改めて力説したい。
- (注4) SAVE IWATEは、寺井氏らの発案で早くも震災3日目の3月14日に活動を開始し、徐々に参加メンバーを拡大、その内容や組織形態を整えていった。まず実践行動が先行するのは非常によいことで、何かというと理屈や体裁にばかりこだわり、実行より先にそれを行なうための規則作りの議論に時間を費やすといった、「役所仕事」とは根本的に性格が異っていた。SAVE IWATEの活動内容等については、「東日本大震災支援SAVE IWATE」のホームページ(<http://sviwate.wordpress.com/>)およびメンバーへの情報伝達メーリングリスト「三陸99」(sanriku99@freeml.com)を参照願いたい。なお、私はSAVE IWATE以外にも、

活発に被災者支援活動を展開している「遠野まごころネットワーク」「大船渡さんさんの会」といった団体とも多少のつながりを有している。

今後これらの諸団体とも連携を深める機会があるかもしれない。

- (注5) 2010年3月にロシアのサンクトペテルブルクで催された「岩手・早池峰神楽公演」は、寺井氏らと元岩手大学留学生のロシア人エフセーワ・エカテリーナさんが企画し、「サンクトペテルブルク・日本の春フェスティバル」のイベントの一つとして行なわれたものである。そもそもエカテリーナさんが岩手大学に在学中に、私が彼女を早池峰神楽鑑賞に連れていったことがきっかけなのだが、2009年同神楽がユネスコの世界無形文化遺産に選定されたことを記念して公演実現の運びとなった。私もこの時寺井氏や神楽グループに同行してサンクトペテルブルクを訪れ、岩手大学と交流協定のあるサンクトペテルブルク国立文化芸術大学とロ日協会の文化センターでロシア人（学生および一般市民）を前に2つの講演を行なってきた。
- (注6) この時を皮切りに、私は（この論考を執筆中の）8月中旬までの間に被災地を計9回訪れた。そのうち3回は家族や友人を案内したものだが、それ以外は毎回何名かの留学生を引率し、視察あるいは現地で何らかの支援活動を行なった。
- (注7) この活動は「岩手モンゴル友好協会」の全面協力のもとに実施された。同協会（会長は元岩手大学長の海妻矩彦氏）は2007年に設立され、岩手在住のモンゴル人留学生らの支援や「岩手・モンゴル友好の森」植樹事業などを行なっている。岡崎もメンバーの一人である。
- (注8) 大和書房『吉田松陰全集』第8巻322頁

Assessment strategies in e-learning: Formative and summative assessment in a tool-mediated learning environment

Mark de Boer

Introduction

Assessment is the motivation for learning. Two types of assessment will be explained throughout this paper; formative assessment (for the purpose of providing feedback to assist the learning process) and summative assessment (administered to provide a grade to the student). Traditional courses being moved online fail to motivate students because they become merely an electronic book online, and this becomes a cumbersome alternative to a much easier take-anywhere textbook to a financially restrained student. With the demand on the students and their schedules as well, students are concerned less with the activities that are formative in nature (Sclater, Conole, Warburton, & Harvey, 2007). By moving a course to the online world without making the transition to what each segment of the course is important for, e-learning becomes less effective and the danger of a course turning into an electronic online book becomes eminent. However, tools available in e-learning software can circumvent this in a number of different ways, yet at the same time, it becomes important that the formative assessment activities be delivered so that they are regarded as providing the necessary assistance that will be relevant during the summative assessment stage. Summative assessment on the other hand needs to be altered to make the formative assessment relevant. If on one hand formative assessment activities provide a skill base for later summative assessment, then the preparation for this summative assessment needs also to be able to educe this new skill set. Summative assessment then must occur in a non e-learning environment. A tool-mediated learning environment provides the necessary complement for both online formative assessment and offline summative assessment. It also provides an arena for collaboration which is not restricted to the face-to-face classroom component. In this paper I will discuss an altered approach to formative and summative assessment that is being used at Iwate University.

Tool-mediated learning courses in an ICT Contents project

The ICT Contents project at Iwate University is a result of a government grant over a three-year period which started in April 2010. The core of the project is to provide broad-based English curriculum across the faculties and

to supplement the lectures to provide the students exposure to English that directly correlates to their chosen field of study. In most cases, the concepts and the vocabulary have already been studied in their native language, Japanese, so the cognitive level of requiring to understand both a new concept as well as a new language is greatly reduced. Bogaert et al. state that language proficiency may be stimulated in some way through a task and that the language doesn't have to be the 'subject' but instead a medium of instruction (2006). Videos are the primary resource for language exposure and they are downloaded from various locations such as YouTube, iTunesU, TED.com, Wildclassroom.com and other educational websites. Yet, iTunesU lectures from MIT for example can be up to 90 minutes in length. Therefore, to make the videos more palatable for the students, these longer videos are cut so that one segment of the video is between one and five minutes in length. The transcribed videos are then analyzed through a corpus (www.lex Tutor.ca) to determine key vocabulary based on the genre of the video. Quizzes are designed around the corpus analysis results and are packaged online with the videos. These video and quiz packages can be used as a supplement to an already designed syllabus, for self-study, or to design an entire course. It is the latter that I will discuss, as it is most relevant to formative and summative assessment.

Formative and summative assessment in a tool-mediated learning environment

To illustrate the four key elements here; tool-mediated learning is defined as a *face-to-face classroom learning* environment that is enhanced by *online activities* outside the classroom. The *summative assessment* is done in the classroom environment and the *formative assessment* is associated with the online activities and peer-peer assessment. The online environment is not restricted to outside the classroom; the students have access to the materials and to the Learning Management System (LMS), in this case Moodle (Dougiamas & Taylor, 2003) during class as well. Moodle offers a variety of activity types that are built around the concept of social constructivism. Constructivism stresses the active role of knowledge construction either individually or within groups (Conole & Oliver, 2007). The classroom is mainly allocated as a collaborative face-to-face environment but the students can also use the LMS to upload documents and discuss class topics through forums. This then allows for further collaboration outside the classroom as the LMS can be accessed through the internet. In some classes taught by the author, students have used an online glossary within the LMS to create vocabulary entries that were not tested by the quizzes but the students have found to be relevant to their studies.

The formative assessment is done through the online video and quiz packages. Although these quizzes deliver a grade, the grade only serves as feedback. There are restrictions, however, that prevent the students from moving through a course without completing the quizzes. As the quizzes provide valuable key vocabulary and information that is relevant to the overall goals of the course, settings can be made in the quizzes so the students are required to achieve a minimum grade before being allowed to move on. If the students do not move on, they find the latter part of the course too demanding and eventually are forced to go back to the quizzes to fill in the gaps. This proves the relevancy of the quizzes. Since these quizzes are formative assessment related, the students use these quizzes to test their vocabulary, knowledge, listening skills and concept skill set. The quizzes are also strategically created to increase in difficulty as the course progresses. A mark on a quiz greater than 90% provides the necessary feedback that understanding has been met and although language acquisition may still not have occurred, the process has started and the students will be required to use the language during the summative assessment phase. This helps complete the language acquisition process.

In short, the quizzes based on the videos provide students with exposure to key language that will become relevant during the summative assessment period. It is during the summative assessment period that the language is used and evaluated.

Summative assessment is implemented in the classroom through putting the onus on the students to apply their knowledge. This can also be group co-constructed knowledge from resources other than the quizzes. In the summative assessment phase, students are evaluated on something that they have created. There are projects that the students can choose from and it is up to the students to work together to complete the project. One of the key elements in the summative assessment environment is the collaboration that occurs within a group. Based on Activity Theory principles (Engeström, 1996), the process of collaborating within a group provides the environment where students can learn how to learn and also learn how to collaborate. Although the final outcome may be a PowerPoint presentation or a group report, the process of collaboration and knowledge building during the collaboration period becomes key. This process is extremely important in building up to the summative assessment phase as this invokes a zone of proximal development (zpd) (Vygotsky, 1978) to form between members of the group. Vygotsky points out 'cooperation with his peers' (1978, 90) and Wells argues, based on a

range of studies, 'it is not necessary for there to be a group member who is in all respects more capable than the others. This is partly because most activities involve a variety of component tasks such that students who are expert in one task, and therefore able to offer assistance to their peers, may themselves need assistance on another task' (Forman and McPhail, 1993; Tudge, 1993 cited in Wells 1999, pp. 323-324). As not all students have the same strengths and weaknesses, the core understanding of working in a group environment is to identify the role as a student within the group and what they are able to contribute to the overall process. Students can co-construct knowledge and share language concepts. Another key element to the face-to-face classroom dynamics is the role of the teacher. The teacher is available to walk around the classroom, ask questions, answer questions and overall provide much more effective one-on-one support to all groups. Kumaravadivelu states that promoting learner autonomy is a matter of helping learners to 'discover their learning potential', and 'understand that autonomy is a complex process of interacting with one's self, the teacher, the task, and the educational environment'. But it must also be realized that 'autonomy is not independence, that is, learners have to learn to work cooperatively with their teachers, peers and the educational system' (2003, p. 133). Ohta also states that developing learner autonomy is a key issue and 'increasing autonomy is evidence of increasing internalization' (Ohta, 2001, p. 74).

Peer centered summative assessment

Throughout the course, students have been building vocabulary, phrases, and concepts through the quizzes and classroom collaboration experience through the face-to-face intervals. The link between the quizzes in the formative assessment phase and the summative assessment phase is made through the preparation of the assessment rubrics. The students with the guidance of the teacher create the rubrics criteria that they will be assessed on. For a PowerPoint presentation for example, students choose criteria such as use of vocabulary, use of concepts to explain meaning and clarity of meaning. Because of this, the assessment that is done is not teacher led, the students are ultimately responsible for peer-peer assessment and assessment criteria. To move in the direction of industry driven education, students need to be able to apply knowledge, apply concepts and create, share ideas, meet and discuss and then use the LMS to communicate during the non face-to-face periods. To apply a final exam as the normal summative assessment at the end of the year to provide a grade to the student seems against the grain of this new

educational thinking. For those students who are involved with the e-learning courses here at the university, the assessment is based on a product, presentation, or final document that the students have produced themselves. Students and teachers together work on assessment criteria in the form of rubrics and the students who are assessing other students' work can use this rubric as a guide. In the production of a report or a product then, the rubrics serve as a guide to help the students produce something that will give them a better grade. The majority of the students rise to the challenge of being given the chance to use the English language that is relevant to their field of study rather than being tested on English as a subject similar to what they have experienced through their junior high and high school years. The link between formative and summative assessment then becomes more apparent since the quizzes and videos become an important necessity for the students as a starting point to understanding what language is important to understand.

Future goals

What the students are doing now paves the way for future students. As these types of classes become more the norm within the university classroom, what students are doing today, will benefit the students in the years to come. Shared online resources, student created videos as well as student generated ideas will raise the bar for the future generations. In the more traditional classrooms where collaborative learning does not exist and formative and summative assessment is not part of the overall syllabus, students are less motivated to learn. With students actually creating, collaborating, sharing documents electronically, and being assessed on something they themselves produce, the students are gaining valuable life skills at the same time as learning how to learn a language.

Conclusion

There is still a long way to go to develop effective e-learning courses that challenge students but are also easily adoptable by any faculty and staff. The structure of the formative and summative assessment here at Iwate University is still in its early stages and much still needs to be investigated to test its effectiveness and validity. Students in the meantime are experiencing a much more vibrant classroom and are enjoying their use of English in a way that is challenging, relevant and rewarding.

References

- Bogaert, N., Van Gorp, K., Bultynck, K., Lanssens, A., & Depauw, V. (2006). Task-based teaching in science education and vocational training. In K. Van den Branden (Ed.), *Task-based language education* (pp. 106-128). Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Conole, G., & Oliver, M. (2007). *Contemporary perspectives in e-learning research*. Routledge: New York.
- Dougiamas, M. & Taylor, P.C. (2003). *Moodle: Using learning communities to create an open source course management system*. Curtin University of Technology: Perth, Australia.
- Engeström, Y. (1996) Non scolae sed vitae discimus: toward overcoming the encapsulation of school learning. In H. Daniels (Ed.) (1996) *An introduction to Vygotsky*. Routledge: London.
- Forman, E.A., and McPhail, J. (1993) Vygotskian perspectives on children's collaborative problem solving activities. In Wells, G. (1999) *Dialogic Inquiry*. Cambridge University Press. Cambridge: UK.
- Kumaravadivelu, B. (2003). *Beyond methods. Microstrategies for language teaching*. New Haven: Yale University.
- Ohta, A. S. (2001). *Second language acquisition processes in the classroom: Learning Japanese*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Assoc. Inc.
- Sclater, N., Conole, G., Warburton, B., & Harvey, J. (2007) E-assessment. In G. Conole and M. Oliver (Eds.) (2007) *Contemporary perspectives in e-learning research*. pp. 147-159. Routledge: New York.
- Tudge, J. (1993) Vygotsky, the zone of proximal development, and peer collaboration: Implications for classroom practice. In G. Wells, (1999) *Dialogic Inquiry*. Cambridge University Press: Cambridge, UK.
- Vygotsky, L.S. (1978) *Mind in Society*. Harvard University Press: Cambridge, MA.

日本語特別コース実施報告

1. 概要

日本語特別コースは全学の外国人留学生が対象の日本語授業である。初級、中級レベルの授業は「国際交流科目」として、上級レベルの授業は「全学共通教育科目」として開講されている。国際交流科目は交換留学生、全学共通教育科目は正規学部留学生が主たる受講対象者である。定員に余裕のある場合には、研究生、大学院生、研究員およびその家族等単位取得しない者の受講も認めている。

2. 受講までの流れ

受講希望者には、毎学期はじめに実施されるオリエンテーションへの参加を義務づけ、英語(尾中専任教員)および中国語(早川専任教員)の通訳を介した説明を行った。オリエンテーション終了後、工学部三輪教員が開発したオンラインプレースメントテストによって初級2レベル、中級2レベル、上級1レベルの5レベルにクラス分けを行った。オリエンテーション実施日、参加者数は以下の通りである。なお、オリエンテーションに参加できなかった学生には個別に対応した。

<前期>4月7日(水) 13:00-15:00 学生センターG38(CALL教室) 参加者 35名

<後期>10月7日(木) 10:00-12:00 学生センターG38(CALL教室) 参加者 45名

3. 授業概要

3.1 開講クラス

<国際国流科目日本語科目>

	科目名	内 容	コマ数/期
初級 I	総合	初めて日本語を学習する人が対象。初歩的な文法、語彙等および日常生活に必要なごく基本的な会話および読み書きの技能を高めた。 テキスト:『げんき I』会話・文法編(The Japan Times)	4
	表記・作文	初めて日本語を学習する人が対象。かなと簡単な漢字(150字程度)の読み書き、および簡単な文章の読み書き能力を高めた。 テキスト:『げんき I』読み書き編(The Japan Times)ほか	1
	会話	初めて日本語を学習する人が対象。日常生活で使う挨拶や簡単な会話を学習した。 テキスト:『げんき I』(The Japan Times)	1
	科目名	内 容	コマ数/週
初級 II	総合	日本語を150時間程度学習した人が対象。初級後半の文法、語彙および日常生活に役立つ基礎的な表現、文法等を学習した。 テキスト:『げんき II』(The Japan Times)	4
	会話	日常生活に役立つやや長いやり取りの会話を学習した。 テキスト:『げんき II』(The Japan Times)ほか	1
	漢字	初級後半レベルの漢字300字程度を学習した。 テキスト:『げんき II』読み書き編(The Japan Times)	1
	読解・作文	日常生活に役立つ簡単な文書を理解、および簡単な文書の書き方を学習した。 テキスト:ハンドアウト	1

中級 I	中級 I 総合	大学生生活(研究室、授業等)に必要な日本語の会話技能および中級レベルの文法・語彙を学習した。 テキスト:(前期)『中級へ行こう』(スリーエーネットワーク) (後期)『現代日本語コース中級 I』(名古屋大学出版会)	2
	会話	日常生活や大学生生活に必要な基礎的な会話技能を学習した。 テキスト:『なめらか日本語会話』(アルク)	1
	読解	アカデミックな文章の基礎的な読解力を高めた。 テキスト:『大学・大学院留学生の日本語1読解編』(アルク)	1
	作文	アカデミックな文章(レポートなど)の基礎的な作成能力を高めた。 テキスト:『大学・大学院留学生の日本語1作文編』(アルク)	1
	漢字	中級前半レベルの漢字 300 字程度の読み書きを学習した。 テキスト:『INTERMEDIATE KANJI Vol.1』(凡人社)	1
中級 II	総合	中級前半修了者対象。大学生生活(研究室、授業等)に必要なやや高度な日本語の会話技能および中級レベルの文法・語彙を学習した。 テキスト:『現代日本語コース中級 II』(名古屋大学出版会)	2
	読解	やや高度なアカデミックな文章の読解力を高めた。 テキスト:ハンドアウト	1
	作文	やや高度なアカデミックな文章(レポート、小論文等)の作成方法を学んだ。 テキスト:ハンドアウト	1
	文系日本語	文系学生に必要な基礎的な語彙・文系の知識を学んだ。 テキスト:ハンドアウト	1
	科目名	内 容	コマ数/週
	口頭表現	(A:前期)アカデミックで高度な口頭表現を学ぶ。 (E:後期)社会の人間関係等を反映した会話の理解と使用力習得を目指す。 テキスト:ハンドアウト	1
上級	読解	大学生生活に必要な高度な読解力を習得する。 テキスト:ハンドアウト	1
	論文作成	大学の研究に必要な高度な文章作成能力を習得する。 テキスト: (前期)『大学・大学院留学生の日本語4論文作成編』(アルク) (後期)『大学生と留学生のための論文ワークブック』(くろしお出版)	1
	文系	(C:前期)大学の文系の研究に必要な高度な語彙や表現の基礎を学ぶ。 (G:後期)文系の様々な分野の基礎的講義の理解力を高める。 テキスト:ハンドアウト	1
	理系	大学の理系の研究に必要な高度な語彙や表現力の習得を目指す。 テキスト:ハンドアウト	1
	合計コマ数		29/学期

4. 実施状況

大学の学期スケジュールに従って毎学期 15 週の授業を実施した。交換留学生が増加し、クラスによって受講者数が大きく増加したところもある。今年度から初級Ⅱレベルに会話と読解・作文の授業を追加し、短期留学生の学習ニーズに対応した。

また、本学の協定大学であるアメリカのアーラム大学 SICE プログラム(盛岡市教育委員会とアーラム大学との協定による英語教育インターンシッププログラム)の学生(初級Ⅱ総合4名、中級Ⅰ総合、漢字、会話各8名)を後期の授業で前半7週間受け入れた。各学期の時間、担当者、受講者数は以下のとおりである。

* 表中受講者数の「特別」は単位取得しない大学院生、研究生、家族等の受講者、「国際」は「国際交流科目」として単位を取得する履修者、「共通」は「全学共通教育科目」として単位取得する履修者数を表す。

<前期> (4月11日～8月5日)

科目名	時間	担当	受講者数		
			特別	国際	共通
初級日本語Ⅰ総合	水金1-4	小野寺淑・大高久枝	-	-	-
初級日本語Ⅰ表記・作文	月5・6	松林和美	-	-	-
初級日本語Ⅰ会話	火3・4	坂本淳子			
初級日本語Ⅱ総合	月木1-4	大高久枝・大畑佳代子	-	-	-
初級日本語Ⅱ漢字	月5・6	坂本淳子	-	-	-
初級日本語Ⅱ会話	水3・4	大高久枝	-	-	-
初級日本語Ⅱ読解・作文	金5・6	大畑佳代子	-	-	
中級日本語Ⅰ総合	月木1・2	松岡洋子	1	4	-
中級日本語Ⅰ会話	水5・6	尾中夏美	1	4	-
中級日本語Ⅰ作文	火5・6	中村ちどり	1	2	-
中級日本語Ⅰ読解	水7・8	橋本学(人文社会科学部)	1	2	-
中級日本語Ⅰ漢字	月3・4	尾中夏美	1	2	-
中級日本語Ⅱ総合	月5・6	加藤理恵	4	4	-
	水3・4	松岡洋子			
中級日本語Ⅱ読解	水7・8	岡崎正道	4	4	-
中級日本語Ⅱ作文	火7・8	加藤理恵	4	4	-
中級日本語Ⅱ文系日本語	月3・4	岡崎正道	4	2	-
上級日本語A口頭表現	月7・8	松岡洋子	1	-	17
上級日本語B読解	水9・10	岡崎正道	2	-	15
上級日本語C文系	木5・6	中村ちどり	1	-	5
上級日本語C理系	金1・2	照井啓介	1	-	7
上級日本語D論文作成	金3・4	菊地悟(教育学部)	2	-	5
合計	29時間	受講者計	28	28	49
			105		

<後期> (10月8日~2月10日)

科目	時間	担当	受講数		
			特別	国際	共通
初級日本語Ⅰ総合	水金1-4	小野寺淑・大高久枝	-	-	-
初級日本語Ⅰ表記・作文	木5・6	小野寺淑	-	-	-
初級日本語Ⅰ会話	火3・4	佐々木仁美	1	0	-
科目	時間	担当	受講数		
			特別	国際	共通
初級日本語Ⅱ総合	月木1-4	大高久枝・大畑佳代子	-	3	-
初級日本語Ⅱ漢字	月7・8	松林和美	-	2	-
初級日本語Ⅱ会話	水3・4	大高久枝	-	3	-
初級日本語Ⅱ読解・作文	金5・6	大畑佳代子	-	3	-
中級日本語Ⅰ総合	月木1・2	松岡洋子	16	16	-
中級日本語Ⅰ作文	火5・6	小野寺淑	2	8	-
中級日本語Ⅰ読解	水7・8	橋本学(人文社会科学部)	-	-	-
中級日本語Ⅰ漢字	月3・4	尾中夏美	10	14	-
中級日本語Ⅰ会話	木3・4	尾中夏美	16	16	-
中級日本語Ⅱ総合	月5・6 水3・4	小野寺淑 松岡洋子	3	2	-
中級日本語Ⅱ読解・漢字	金7・8	岡崎正道	-	-	-
中級日本語Ⅱ 文系日本語	月3・4	岡崎正道	-	-	-
中級日本語Ⅱ作文	火7・8	佐々木仁美	2	2	-
上級日本語E 口頭表現	月7・8	松岡洋子	2	-	10
上級日本語F 読解	水9・10	岡崎正道	3	-	9
上級日本語G 文系	木5・6	藪敏裕他(教育学部)	2	-	7
上級日本語G 理系	金1・2	照井啓介	1	-	5
上級日本語H 論文作成	金3・4	大野眞男(教育学部)	2	-	6
計	29時間	受講者合計	60	69	37
			166		

受講数合計は延人数

5. 問題点・課題

5.1 施設設備

前期は学生センターB棟改修工事のため教室が学生センターA棟、教育学部、図書館に分散され、授業の実施に混乱がみられたが、後期からは改修後の施設で日本語授業の教室は集約された。学生への諸連絡も同じ棟の国際課で行えるため、対応がスムーズになった。また、空調は各教室に空調設備が設置されたため、大幅に改善されたが、冬期の温度調整が難しい(エアコンのため、暖気が上方に集中してしまい、足下の気温が上がらない)。節電のためにもサーキュレーターを設置等で対応が必要である。

5.2 履修者の来学時期とその対応

特に研究生や研究員など来日時期が定まらず、開始時期に間に合わないケースが見られたが、通常授業での対応は困難であるため、学生チューター、オンライン教材での個別学習等を活用し個別に対応した。

5.3 教員の転出

後期に専任教員1名の転出があり、補充がなされていない。そのため、非常勤講師の授業数を増やすことで対応した。コース運営の各種業務は専任教員が担当する必要があるため、専任教員の補充が必要である。

以上

(文責:松岡洋子)

日本語研修コース実施概要

1. コースの目的

日本語研修コースは、大学院入学前の日本語予備教育プログラムであり、1学期間の日本語集中コースとして開講されている。受講対象となる学生は、岩手大学と近隣の大学の大学院へ進学する予定の留学生（大使館推薦の国費研究留学生および教員研修留学生）である。また、国際交流センター長の許可を得た場合は岩手大学の留学生とその家族、岩手県立大学留学生とその家族も受講することができる。毎学期開講され、日常生活と研究に必要な日本語の基礎を学ぶ。

2. 平成 22 年度前期

(1) 受講生

受講生は7名で、岩手大学研究生（工学部、農学部）4名、交換留学生1名、岩手大学大学院生の家族2名である。国籍は中国5名、ルーマニア1名、台湾1名である。

(2) 授業日程

4月7日	オリエンテーション
4月12日	授業開始
7月30日	修了試験
8月上旬	研修旅行

(3) 週間時間割

	(月)	(火)	(水)	(木)	(金)
I (9:00~10:30)	総合日本語	総合日本語	読解・作文	総合日本語	総合日本語
II (10:30~12:00)	総合日本語	総合日本語	読解・作文	総合日本語	総合日本語
III (13:00~14:30)	漢字	漢字		漢字	漢字
IV (14:45~16:15)			個別指導		

※ 漢字クラスは 13:45~14:00 の間は自習時間

※ 日本語授業のレベルは、全て初級 I

(4) 授業担当者

総合日本語：	松林和美、坂本淳子、小野寺淑（国際交流センター非常勤講師）
読解・作文：	中村ちどり（国際交流センター専任教員）
漢字：	松林和美、坂本淳子、小野寺淑（国際交流センター非常勤講師）
個別指導：	中村ちどり（国際交流センター専任教員）

3. 平成 22 年度後期

(1) 受講生

受講生は5名で、岩手大学研究生（工学部）1名、教員研修生1名、家族3名である。国籍は中国4名、マダガスカル1名である。

(2) 授業日程

10月8日	面接・オリエンテーション
10月12日	授業開始
12月23日～1月7日	冬休み
1月上旬	スキー研修旅行
2月17日	修了試験

(3) 週間時間割

	(月)	(火)	(水)	(木)	(金)
I (9:00～10:30)	総合日本語	総合日本語	読解・作文	総合日本語	総合日本語
II (10:30～12:00)	総合日本語	総合日本語	読解・作文	総合日本語	総合日本語
III(13:00～14:30)	漢字	漢字		漢字	漢字
IV(14:45～16:15)		日本事情	個別指導		

※ 漢字クラスは 13:45～14:00 の間は自習時間

※ 日本語授業のレベルは、全て初級 I

(4) 授業担当者

総合日本語：	松林和美、佐々木仁美、小野寺淑（国際交流センター非常勤講師）
読解・作文：	佐々木仁美（国際交流センター非常勤講師）
漢字：	松林和美、坂本淳子、小野寺淑（国際交流センター非常勤講師）
個別指導：	松岡洋子（国際交流センター専任教員）

4. 成果と課題

少人数での集中講座であり、短期間に日本語の基礎力を高める効果が認められる。しかし、近年国費留学生の配置数が減少傾向にあり、本コースの受講該当者が在籍しない学期がある。その代わりに交換留学生の受講希望者が参加するように変化している。このような受講対象者の変化によってカリキュラムの改正が必要になってきた。なお、今年度後期から、担当専任講師の移動により担当者に変更があった。

(文責：松岡洋子)

全学共通科目(日本事情／多文化コミュニケーション)

1. 日本事情 A・B

この授業では、外国人留学生が日本で学びまた日常生活を営む上で役にたつ、日本に関する諸事情、諸文化事象等について講義する。具体的な項目は以下の通り。

- (1) 日本語の言語表現の特性
- (2) 日本人の精神と日本文化の特質
- (3) 日本の歴史、歴史上の人物、日本の思想
- (4) 政治・経済・地理・風俗・現代社会の諸問題等、現代日本の諸問題
- (5) その他、日本と日本人に関するあらゆる事柄、また日本と世界の関係など

これらの中から、そのつど具体的なテーマを設定して講義するのだが、当然ながら出席している学生の日本語能力や問題関心等により、内容をいろいろ考え工夫している。

また学生の出身国についても、考慮を払う必要があるであろう。特に政治的に対立する国の学生が同じ授業に出ているような場合は、どちらか一方に味方するような（あるいはこちらにそのつもりがなくても、そう受け取られかねないような）発言は、極力慎む配慮が求められよう。

(担当:岡崎正道)

2. 多文化コミュニケーション A・B

日本人学生、外国人留学生共修科目として設定し、多文化社会におけるコミュニケーション課題をテーマに討論、共同作業を通じた実践的な授業を行った。受講生数を30名程度に制限して実施した。

前期は学部2年次および交換留学生が主たる受講者で、授業のまとめの段階で二戸市教育委員会からの依頼により二戸市内の中学生25名と岩手山青少年交流の家で合同合宿を行った。合宿では多文化コミュニティでの課題解決課題を与え、グループでの共同作業によって解決を図った。

後期は学部1年次および交換留学生が主たる受講者で、まとめの段階で秋田大学、弘前大学との合同合宿を岩手山青少年交流の家にて行った。合宿では、紙芝居作成の共同作業を通じて、多様なメンバーが集まるグループでの作業の進め方、自己の役割などについて体験を通じて学習した。

(担当:松岡洋子・尾中夏美)

国際交流科目実施報告

1. 概要

国際交流科目は交流協定大学からの交換留学生を主な受講対象として施されるが、日本人を含む正規学部生も履修が可能で専門科目自由科目単位として認められる。授業は、英語による専門科目の授業と初・中級レベルの日本語授業が開講された（日本語が科目については「日本語特別コース実施報告」の項を参照）。主な受講生は交換留学生（ノースセントラルカレッジ、セントメアリーズ大学、ボルドー第3大学、明知大学、清華大学、寧波大学、曲阜師範大学、大連理工大学、西北大学、吉林農業大学、山東工芸芸術学院、高雄師範大学、サンクトペテルブルグ国立文化芸術大学）である。

2. 実施状況

平成21年度の開講状況は以下のとおりである。

<前期；4月12日～8月4日> (国際交流科目として登録者のあった科目のみ記載)

曜日	タイトル	Title	単位	担当教員	受講
火 03-04	もう一つの国：1930年代のアメリカと現代の誕生	Another Country: The USA in the 1930's and the Birth of Modernity	2	Alan Farr	2
火 09-10	映画に見る日本の文化と社会	Japanese Culture & Society through Films	2	Alan Farr	2
金 01-04	スクールインターンシップ	School Internship Program	2	山崎友子	2
集中	個別研究	Independent Studies	2	尾中夏美 松岡洋子	8
集中	岩手学	Iwate Studies	2	尾中夏美	5

<後期；10月8日～2月10日>

曜日	タイトル	Title	単位	担当教員	受講
月 05-06	日本文化と日本人心理の発見	Discovering Japanese Culture and Japanese Psychology	2	齋藤博次	4
火 09-10	映画に見る日本の文化と社会	Japanese Culture & Society through Films	2	Alan Farr	2
水 05-06	やさしい日本語で語る日本の古典文学	Japanese Classical Literature in easy Japanese	2	家井美千子	4
水 07-08	文化の諸相	Cultural Domains	2	M. Unher	2
金 01-04	スクールインターンシップ	School internship Program	2	山崎友子 James Hall	1
集中	個別研究	Independent Studies	2	松岡洋子 尾中夏美	7
集中	岩手学	Iwate Studies	2	尾中夏美	
集中	国際合宿研修	Multicultural Study camp	2	尾中夏美 松岡洋子	9

3. 課題と今後の展望

国際交流科目の担当教員は授業数の負担が大きく、新たに担当教員を発掘することが困難である上に、担当教員の退職等によりさら開講授業数が減少する。現行の運営方法では国際交流科目の維持そのものが困難であるため、大学教育総合センターと協力して検討ワーキンググループが立ち上がり、23年度中に新たな運営形態が立ち上がる方向で検討が続けられている。

また、昨年度に引き続き、「国際合宿研修」を2月に実施し、岩手大学の海外協定大学のタイ・サイアム大学から2名、岩手大学5名（うち留学生2名）、盛岡大学2名の計9名が受講した。運営費等で大学の負担が大きいため継続性については検討しなければならないが、隔年実施開講の方向で継続を検討することとなった。

以上
(文責：松岡洋子)

夏期休暇および個別日本語補講報告

1. 概要

夏期休暇日本語補講は学期中の通常クラスに参加できない学生や、通常クラスで学習したことを復習したい学生を対象として開講し、アールム大学SICEプログラム学生の前半日本語教育としても活用した。また、学習者の個別ニーズに対応するため、ボランティア学生による補講を実施した。各クラスの内容は以下のとおりである。

①夏期休暇日本語補講初級Ⅱ予備クラス

期間： 2010年8月23日～9月16日 9:00-12:00 (全8回16コマ)

対象： 初級前半修了者、初級修了、中上級者

アールム大学SICEプログラム(12名)

内容・スケジュール：

	初級前半終了クラス		初級終了クラス		中上級クラス	
	内容	担当	内容	担当	内容	担当
8月23日	日本事情1					尾中
8月26日	日本事情2					尾中
8月30日	聴解(1-3課)	大高	聴解(許可/禁止)	小野寺	文法(理由)	坂本
	漢字(1-3課)	大高	漢字(動詞)	小野寺	語彙(名詞)	松林
9月2日	文法(名詞文動詞文)	佐々木	文法(条件)	小野寺	文法(仮定)	坂本
	聴解(4-6課)	佐々木	聴解(授受)	小野寺	聴解(N2)	松林
9月6日	漢字(4-6課)	大高	漢字(形容詞)	小野寺	文法(ついて)	大畑
	文法(て形/接続)	大畑	文法(授受)	小野寺	語彙(副詞)	坂本
9月9日	聴解(7-9課)	佐々木	聴解(使役/受け身)	小野寺	語彙(動詞)	坂本
	漢字(7-9課)	大畑	漢字(位置/量)	小野寺	聴解(N2)	松林
9月13日	文法(ない形)	大高	文法(受身)	小野寺	N2	自習
	漢字(10-12課)	大高	漢字(科目)	小野寺	N2	自習
9月16日	文法(助詞/比較)	松林	文法(N4)	小野寺	聴解(文構成)	大畑
	聴解(10-12課)	松林	聴解(助言)	小野寺	聴解(短文)	大畑

②補講

日本語能力試験対策

期間：2010年5月7日～7月2日(毎週金曜日13:00-14:30)

対象：学部学生5名

担当：松岡洋子

内容：日本語能力試験N1問題集に取り組み、受験対策を行った。

③個別学習支援

日本語能力試験受験者に対して、学生ボランティアによる個別学習支援を行った。

期間：2010年4月下旬～2月初旬

対象：教員研修生 1 名、研究生 2 名

担当：教育学部 3 年次 3 名、同 2 年次 2 名

2. 成果と課題

夏期休暇補講は SICE プログラム学生も参加して開講したが、今年度は初級前半終了、初級終了、中上級の 3 レベルで文法、漢字、聴解の復習を行った。補講では、日本語能力試験 N1 対策講座を行い、受講者 5 名中 3 名が合格した。また、学生ボランティアによる個別学習支援を行った。

課題としては、学生ボランティアの不足があげられるが、教育学部の日本語教員養成コース受講学生を中心に呼びかけを行い、支援方法等について情報提供を行いたい。

以上
(報告：松岡洋子)

短期留学生修了研究(個別研究)報告

1. 研究リスト

平成 22 年度は前期に 7 名、後期 7 名の学生が個別研究に取り組み、以下の通り研究をまとめた。

前期		
氏 名	所属	研究課題
于 清	中国・曲阜師範大学	中日の大学生アルバイト実態の対照分析 -山東省と岩手県の大学生のアルバイトの比較-
孔 昕昕	中国・曲阜師範大学	中国語の中の日本語—ネット流行語大発見
ベサニー・ロングフェロー	アメリカ・ノースセン トラルカレッジ	ピンク色の服を着た男性
王 ジュンエン	中国・寧波大学	日本の大学生の中国イメージとメディアの影響
サリユーナ	ロシア・サンクトペテ ルブルグ情報大学	若者の引きこもり
ルーチョ・モルガンテ	ボルドー第三大学	国際的企業のプロモーション戦略-ユニクロの場合-
マルゴ・シュナン	ボルドー第三大学	日本人に取ってのキリスト教-フランス人との違い-
後期		
トレントン・マコーマス	アメリカ・ノースセン トラルカレッジ	
陳 ブンケン	中国・寧波大学	北野武の暴力美学
陳 ブン	中国・寧波大学	「やっと」、「ようやく」、「ついに」、「とうとう」の使い分け —副詞の日中対照—
蘇 嬌	中国・寧波大学	現代日本の女性言葉-文末詞を中心に
于 洋	中国・曲阜師範大学	足の文化
ウォン ジヘ	韓国・明知大学	なぜ日本の就活生たちはリクルートスーツを着るのか
ベ ヒョンジ	韓国・明知大学	日韓言語文化の相違点 -『ハリーポッターと賢者の石』を中心に

短期交換留学生に対して必修化し、国際交流センター担当教員が修了発表までのスケジュールを提示し、指導教員の助言のもとに個別研究を進め、口頭発表用資料作成および最終レポート作成指導を行った。修了発表会では教員、学生との質疑応答や議論が活発に行われた。

2. 課題

短期留学生の増加に伴い、担当教員の負担が増えた。学生個々の指導教員の協力を得て、学生たちが主体的に研究に取り組めるよう来日当初から指導を継続させることが望ましい。

以上
(文責：松岡洋子)

北東北国立3大学外国人留学生合同合宿研修会報告

1. 実施概要

秋田大学、岩手大学、弘前大学では、留学生教育の連携を図ることを目的とし北東北3大学合同合宿が平成16年度から行われている。今年度は第7回目となり、岩手大学を幹事大学として次のような内容で実施された。

期 間 : 2010年12月11日(土)～12月12日(日)

場 所 : 岩手山青少年交流の家

内 容 : 多文化グループによる創作活動

参加大学: 秋田大学 28名(留学生16名、日本人学生9名 名 引率3名)

弘前大学 16名(留学生8名、日本人学生6名 引率2名)

岩手大学 21名(留学生13名、日本人学生6名、引率2名)

計 65名

2. 研修内容

2.1 スケジュール

12月11日(土)

11:00-11:30	集合・オリエンテーション
13:00-15:00	交流ゲーム
15:00-17:00	共同作業
19:00-20:30	共同作業
20:30-22:00	自由時間(入浴)

12月12日(日)

6:30-7:30	起床・洗面
9:00-12:00	共同作業
13:00-15:00	発表・、まとめ

<研修の目的>

多文化状況におけるコミュニケーションに必要な知識、技能や具体的な課題について参加者に体験的に学ばせるために合宿研修を実施した。

2.2 合宿の様子

共同作業として作成条件を規定して紙芝居作成を行ったが、各グループで工夫が見られた成果物ができた。共同作業中は留学生の日本語能力の不足などが理由でうまく進められない、意見が対立してまとまらない、などの課題に対して、多文化コミュニケーションの授業での経験などを活用して解決を図っていた。日本語力の不足する学生に配慮して英語で説明を加えながら進めたが、グループ活動になると十分な対応ができなかった。複言語による作業に対する学生の能力を高める機会を増やす必要がある。

3. 今後について

3 大学の協議の結果、合宿は単位化して実施することで合意したが、弘前大学では対応する科目の設定が難しく、2大学での単位化となった。2011年度は岩手大学が当番大学である。なお、実施に当たっては担当者の負担、経費の捻出などの課題があり、継続的に検討する必要がある。

以上

(文責：松岡洋子)

(写真あり)

地域日本語教育支援事業報告

1. 事業の趣旨

本事業は、岩手大学国際交流センターの中期計画および年度計画に基づき実施する地域貢献事業の一環である。平成22年度はセンター経費、助成金等を活用し、外国出身の子どもや移民的背景を持つ子どもたちの日本語及び教科学習支援に関わる事業および東北地域の日本語学習支援関係者の情報交流を目的とし日本語学習支援ネットワーク会議を実施した。

2. 事業内容

2.1 子どもの学習支援事業

①いわて多文化子どもの学習支援連絡協議会総会

日時：2010年6月29日（火）13:00-15:00

場 所：岩手大学事務局第一会議室

参加者：二戸市教育委員会 学校教育課長 千葉 隆

盛岡市教育委員会 学校教育課主査 佐紀 修

一関市教育委員会 学校教育課長 小菅 正晴

(財)岩手県国際交流協会 事務局長 稲田 収

いわて多文化子どもの教室むつみっこくらぶ代表 村井 好子

ゆうの会代表 熱海アイ子

岩手大学教育学部 准教授 新妻 二男（議長）

岩手大学国際交流センター長 大野 眞男

岩手大学国際交流センター 准教授 松岡 洋子

岩手大学国際課 上杉明

議事：

1. 平成21年度いわて多文化子どもの学習支援連絡協議会関連事業報告
2. 平成22年度いわて多文化子どもの学習支援連絡協議会関連事業計画
3. 外国人児童生徒受入並びに支援に関する研修会開催の提案
4. 子どもの学習支援体制作りの連携について ―アンケート調査から―

・アンケートの結果、就学準備教育、保護者と学校とのつながりの支援、人材研修および人材活用について、各機関、団体の連携の必要性が確認された。必要経費の負担方法も含め、どのように連携できるか、各教育委員会、参加団体で検討を行い、情報を共有していくことを確認した。

5. 意見交換

- ・各地域、各団体での現状について意見交換があった。外国につながるのある子どもは移動が激しく、いつ編入学してくるかわからないため、対応がしづらい。地域、学校によっては個別に外部からの支援者を受け入れたり、教員間で協力しながら対応している例もあるが、日本語できないなら入学はできないと、就学拒否を行った例も見られる。特別支援、学習支援員等の既存の制度、資金を活用する方法も検討しながら、受け入れ態勢の整備、支援方法の確立について今後も協議会を中心に検討を進めることを確認した。
- ・岩手大学国際交流センターが主催してきた子どもの合宿研修および人材育成研修会については、今年度は経費が確保できない。学内で調整をし、事業を継続できるよう検討を行うこととしたい。

②いわて多文化子どもの学習支援者研修会 10

日時：2010年11月26日（金）10:00-16:30

場所：岩手県庁合同庁舎7階中会議室

主催：岩手県教育委員会 岩手大学国際交流センター

後援：いわて多文化子どもの学習支援連絡協議会

参加者：30名

内容：◎基調報告：久慈中学校、ゆうの会、上田小学校からの活動報告

◎基調講演：外国人児童生徒の学習支援の現状・課題と展望(松岡)

◎ラウンドテーブル：参加者によるグループ別意見交換

③多文化子どもの合宿研修 10(岩手県国際交流協会助成事業)

日時：2011年2月26日（土）～27日（日）

場所：岩手山青少年交流の家（岩手県滝沢村）

内容：合宿形式の研修会で、初日は昼食後から個別学習、百ます計算、夜は交流ゲーム、2日目は個別学習を行った。

参加者：子ども 10名（中国8、モンゴル1、フィリピン1）

留学生 3名（中国1、インドネシア1、フランス1） 日本人学生 6名

保護者 3名 外部講師 3名 引率 2名 計 27名

④情報整備と発信

ホームページにより情報発信を行った。また、教材等の充実を引き続きはかり、地域で活動する支援者へ情報提供を行った。

<成果と課題>

協議会には資金的基盤がないため、岩手大学、(財)岩手県国際交流協会が各種助成金を活用して事業を展開したが、合宿研修等、直接子どもの学習支援を行う活動については、財政的基盤がないと継続が困難である。各関係機関が連携し、財政的課題を解決するべきである。

2.2 日本語学習支援情報交流事業

日本語学習支援ネットワーク会議 10 in MORIOKA

日時：2010年11月20日（土） 10:00-16:30

場所：岩手大学学生センターA棟G21大・G21・G22

主催：岩手大学国際交流センター 岩手県国際交流協会

後援：いわて多文化子どもの学習支援連絡協議会

参加者：100名

内容：

◎教材ワークショップ『『にほんごこれだけ！1』を使いこなそう！』

講師：国立国語研究所 森 篤嗣氏・広島市立大学 岩田 一成氏

◎基調報告「文化庁『生活者としての外国人』のための日本語教育事業と

外国人散在地域の日本語学習支援」

講師：文化庁国語課 仙田武司氏

◎ラウンドテーブル

「にほんごこれから！」語ろう、見つけよう、地域の日本語学習支援の未来

進行：【子ども支援のテーブル】

田所 希衣子氏（外国人の子ども・サポートの会）

【大人支援のテーブル】 内海 由美子氏（山形大学）

<成果と課題>

平成17年度より始まった「日本語学習支援ネットワーク会議」は、岩手大、東北大、山形大、秋田大、福島大学を東北の国立大学のネットワークを活用し、地域の日本語学習支援に関する関係者、関係機関の情報交流が行われてきた。大学が本事業を主催することにより、行政、民間をつなぐ役割を果たすことができたことが成果であるが、青森県での開催の目処が立たず、今年度は岩手大学で開催した。教材紹介や文化庁の日本語教育事情紹介など新たな試みを行い、参加者から評価を得た。この会議でつながったネットワークは各地での研修会の講師相互招聘、研究会の共同開催などに発展しており、一定の役割を果たしている。財政的基盤がないことが課題ではあるが、来年度以降も継続の方向で検討する。

以上

（文責：松岡洋子）

平成 22 年度外国人向け図書館説明会実施報告

1. 目的等

国際交流センターでは、岩手大学に入学した外国人留学生のための図書館説明会（ライブラリー・ツアー）を毎学期行っている。中央図書館では毎年 4 月に各学部の新入生向けライブラリー・ツアーを行っているが、国際交流センターの説明会ではこの内容に加え、日本語が不十分な留学生に対し、容易な日本語・英語・中国語で施設の説明を行う。また留学生用の図書・VCR について詳しい説明を与え、文献検索や図書の貸し出し、VCR の視聴等までを実際に体験する。なお、今年度から、主たる説明は図書館職員が行い、国際交流センター教員が通訳を行った。

2. 期日・場所・参加者

岩手大学中央図書館

前期：平成 22 年 4 月 8 日

参加者約 20 名

後期：平成 22 年 10 月 7 日

参加者約 40 名

3. 実施内容

- (1) 図書館 1 階ロビー・レファレンス等の説明
- (2) 図書の貸し出し・返却・自動貸出機の使用法
- (3) ビデオ・テープの貸し出しと館内での視聴法
- (4) 積層書庫・電動書庫の説明と電動書架の動かし方
- (5) OPAC による図書の検索（日本語と英語の操作）
- (6) 留学生用の国際交流図書の説明と日本語レベルの見方
- (7) マルチメディア情報閲覧室、ビジネスコーナー、グループ学習室、新聞・雑誌コーナー等の施設の説明
- (8) 図書館でのマナー、投書の方法について

平成 22 年度岩手大学 UURR プロジェクト報告

1. UURR プロジェクトチーム

岩渕 明	理事（地域連携・国際連携担当）・副学長
大野 眞男	プロジェクトリーダー 国際交流センター長
堀江 皓	顧問 工学部客員教授
藪 敏裕	教育学部教授
新妻 二男	教育学部教授
平原 英俊	工学部准教授
壽松木 章	農学部教授
小野寺 純治	地域連携推進センター教授
対馬 正秋	地域連携推進センター教授・技術移転マネージャー
早川 智津子	国際交流センター准教授
上杉 明	研究交流部国際課課長
鈴木 一寿	研究交流部研究協力課副課長
崔 華月	研究交流部国際課外国語専門職員
石沢 友紀	研究交流部国際課主任

2. UURR プロジェクトの趣旨

成長著しい中国においては、産学連携が経済発展の一翼を担っている。他方、日本の産業界は市場の将来性を展望し、改めて中国への技術・資本の進出を開始しようとしている。

本学では、学長特命プロジェクトとして、平成 15 年度より、これまでの学術交流及び地域連携の成果を踏まえ、国際的な大学間ネットワークを活用した地域企業の国境を越えたビジネス・チャンスの場を造り出し、地域経済の発展に寄与するための事業（University and University+Region and Region=大学・大学と地域・地域の連携事業：UURR プロジェクト）を推進してきたところである。

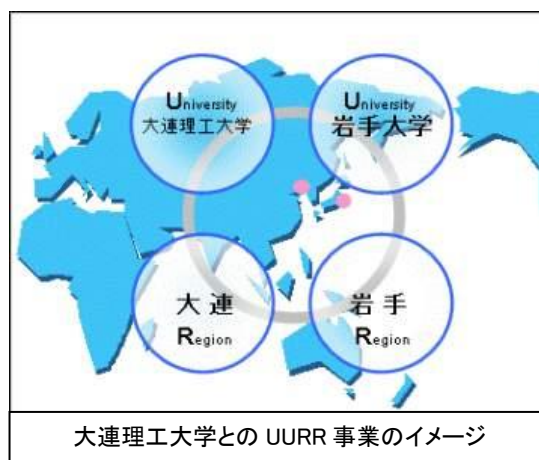
3. 平成 22 年度における UURR 事業

3.1 大連理工大学との UURR 事業

(1) これまでの経緯

岩手大学は、大連理工大学との学術交流協定（平成 17 年 5 月 23 日締結）に基づき、平成 18 年 4 月に大連理工大学内に両大学共同出資の「大連理工大学・岩手大学国際連携・技術移転センター」（以下、「センター」と呼ぶ。）を開設した。また、本事業推進のため、岩手大学内において、「岩手大学・大連理工大学国際連携・技術移転室」（以下、「技術移転室」と呼ぶ。）を設置し、センターの運営及び事業に係る事項について両大学で協議のうえ、国際的な産学連携、学術交流、学生交流等の連携事業を推進している。

このような本学と大連理工大学との UURR 事業の取組みが評価され、平成 19 年 2 月に、日本貿易振興機構（ジェトロ）の Local to Local 産業交流事業（事前調査案件）に採択され、続く、平成

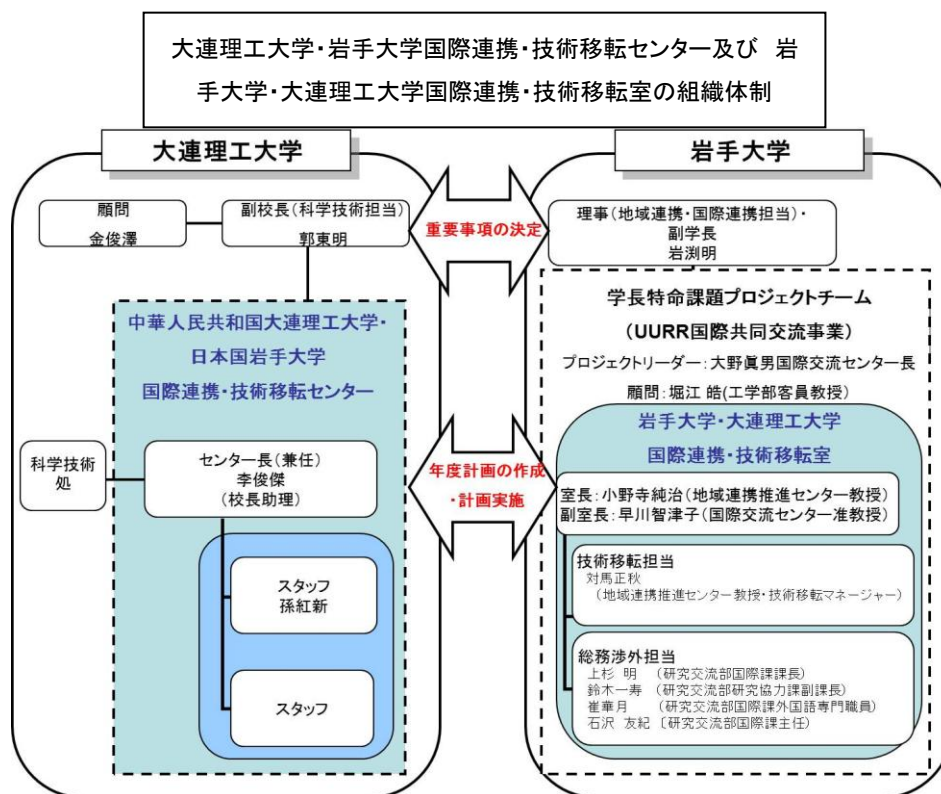


19年度から21年度までの3か年度にわたり、ジェトロの「地域間交流支援（Regional Industry Tie-Up Program：RIT）事業」（以下、RIT事業）に、「岩手地域－中国大連地域（ものづくり基盤技術）」案件が採択され、大連へのミッション派遣及び第1回、第2回「大連理工大学・岩手大学国際科学技術・産業交流会（RIT事業・UURRプロジェクト）」及び「日中金型企業交流会（RIT事業・UURRプロジェクト）」を開催したほか、大連地域の有力企業の岩手招聘、本学研究者等による大連出張調査等を実施した。

以下、平成22年度における大連理工大学とのUURR事業について述べる。

(2) 岩手大学の技術成果の中国企業への移転の推進

8月2日～5日、岩手大学・大連理工大学国際連携・技術移転室の室長小野寺純治教授、崔華月氏が、（株）ゴーイング・ドットコム（本社東京、盛岡市産学官連携研究センターに同社岩手研究所を有する）と大連理工大学との連携プロジェクトに関し、大連理工大学を訪問し、双方の協力調整のあり方等につき、意見交換を行った。



(3) 両大学の教職員の交流及び共同研究の推進

- ① 5月5日、岩淵明理事（産学連携・国際連携担当）・副学長が大連理工大学の客員教授の称号が授与されたほか、両大学間の研究者間で学術交流を実施した。
- ② 2011年3月2日～3日、岩淵理事・副学長ら一行が大連理工大学を訪問し、李俊傑校長助理及び寧桂玲副校長とそれぞれ会談を行い、同大学金型センターの研究者との間で学術交流及び共同研究について協議を行った。李俊傑校長助理との会談では、センターの平成23年度の計画及び日中韓3大学シンポジウムについて意見交換を行ったほか、センターの今後の運営について、平成23年度に大連理工大学の関係者を岩手大学に招へいし、具体的に協議することとした。寧副校長との会談では今後の両大学の学生交流プログラムについて意見交換が行われ、国際合作・交流処の陳宏俊副処長から大連理工大学の学生交流プログラムについて紹介があった。

(4) 中国政府からの補助金交付

中国国家外国専門家局及び大連市外国専門家局共同採択の「大連理工大学・岩手大学国際連携・技術移転センターのプラットフォーム構築事業」に対して補助金が交付された。

(5) 両大学の関連分野の研究者及び企業関係者による企業視察実施

5月5日、岩手ソフトウェアセンター事業（経済産業省地域企業立地促進等事業費補助金（地域産業集積海外展開支援事業））の「大連 IT ミッション」に同行して、大連を訪問し、5月5日、大連理工大学において「日中 IT 技術・産業交流会」を共同開催した。大連ソフトウェアパーク（软件园）股份有限公司（DLSP）、大連億達信息技术有限公司、大連華暢電子通信技術有限公司、大連優聯科技有限公司（ULTECH）等の大連市企業と(株)ネクスト、(株)クーシー、(株)IBCソフトアルファ、(株)アイプランツ・システムズ、キャッツ(株)等岩手県企業等がそれぞれ自社を紹介し交流を図ったほか、中国側企業の視察を行った。



日中 IT 技術・産業交流会

11月21日～22日、大連泰康科技有限公司戴維董事長が岩手を訪問し、岩手大学藤井克己学長、盛岡市谷藤裕明市長を表敬訪問したほか、(株)IBCソフトアルファ、(株)ネクスト、(株)システムエンジニアリングなど盛岡市内のソフトウェア関連企業を訪問して情報交換を行った。また、岩手大学千葉研究室を訪問し、千葉則茂教授及び研究室の中国人留学生と研究面での交流を行った。

(6) 両大学間の教育・学生交流の実施

- ① 平成20年11月に締結した岩手大学工学部と大連理工大学化工学院との学生交流に関する覚書に基づき、工学部熊谷直昭教授・宇井幸一准教授は大連理工大学化工学院の修士課程学生2名をリチウム電池の材料研究の特別聴講生として1年間受け入れた。
- ② (株)ゴーイング・ドットコムが従業員1名を大連理工大学ソフトウェア学院に派遣（留学）し、ソフトウェア学院と同社のプロジェクトの強化を図った。
- ③ 2011年3月3日、岩淵理事・副学長（大連理工大学客員教授）が大連理工大学機械学院の金型専攻の学生に対し、“Introduction of research of die and mold technology in Iwate University”（岩手大学における金型技術研究の紹介）と題する講義を行った。

(7) チームを組織しての大規模な商談会参加

- ① 上述のとおり、5月5日、大連理工大学において「日中 IT 技術・産業交流会」を開催し、日中の参加企業間で交流が行われた。
- ② 6月22日、大連において開催された「第8回中国国際ソフトウェア及び情報サービスフェア」に参加し、大連理工大学及び日本企業とともに展示を行った。岩手大学からは「自然現象のアニメーション技術」、ゴーイング・ドットコムと大連理工大学の共同研究成果について展示がなされたほか、岩手企業である(株)アイプランツ・システムズ、(株)アイシーエスが各社の展示を行った。
- ③ 11月9日～15日、上海で開催された「2010年中国国際工業博覧会」において、両大学の連携についてPRを行った。

- ④ 11月16日～18日、深圳で開催された「第12回中国国際ハイテク成果交易会」において、センターの成果等について展示を行った。

4. UURRの将来展望

上述のとおり、平成22年度におけるUURRプロジェクトは中国の大学である大連理工大学との交流を中心に行われた。その間、他大学においても、本プロジェクトに対し関心が示されており、以下紹介する。

4.1 韓国国立ハンバット大学校を交えた日中韓3大学の連携可能性の模索

(1) 「日中韓大学国際産学官連携セミナー」開催

9月9日、岩手大学、大連理工大学、韓国国立ハンバット大学校は、ハンバット大学校において、「日中韓大学国際産学官連携セミナー」を共同開催した。席上、3大学は、今後3大学間で同セミナーを持ち回り開催することなどを内容とする国際的な産学官連携に関する覚書(MOU)に署名した。翌10日、ハンバット大学校産学協力団の案内で、同大学の科学技術施設及び大田(テジョン)市の鑄造企業等を視察した。

以上

(文責：早川智津子 国際交流センター)

米国アールラム大学サイスプログラム関連事業報告

1. 2010年度サイスプログラム概要

岩手大学では米国インディアナ州にあるアールラム大学と2003年8月11日に学術協定を締結し、2005年度にはさらに学生交流の覚え書きを交わした。本学はアールラム大学が毎年盛岡市に学生を派遣して実施するサイスプログラム（SICE: Studies in Cross-Cultural Education）に対して以下の支援を行っている。

(1) サイス学生に対する日本語教育の提供

(2) サイスプログラムの引率教員がサイス参加学生に対して授業を行う教室の提供

今年度のプログラムの概要は以下の通りである。

受け入れ期間：2010年8月19日（木）～12月2日（木）

参加人数：12名

2. 日本語教育（担当：松岡洋子）

<スケジュール>

来日後のスケジュールは以下のとおりである。なお、日本語教育は原則として毎週月曜と木曜の午前中2コマの授業を行った。

- | | |
|----------------------|---------------------|
| ① オリエンテーション | 8月21日 |
| ② 日本語教育1期：夏期休暇日本語補講 | 8月23日－9月16日（計16コマ） |
| ③ 日本語教育2期：国際交流科目（前半） | 10月14日－12月2日（計36コマ） |

<内容>

① 夏期休暇日本語補講

8月23日（月）自己紹介・中学生活（中学校でのインターンとしての生活に必要な表現）

8月26日（木）日本人の習慣について

8月30日（月）～9月16日（木）

【初級前半終了クラス】『初級日本語 げんきⅠ』復習

【初級終了クラス】『初級日本語 げんきⅡ』復習

【中上級クラス】日本語能力試験2級相当の文法、漢字、作文

*詳細は本年報の「夏期休暇日本語補講報告」の項参照のこと。

② 国際交流科目（前半）、全学共通教育科目（前半）

【初級後半レベル】初級日本語Ⅱ総合（4名）

【中級前半レベル】中級日本語Ⅰ総合＋中級日本語Ⅰ漢字＋中級日本語Ⅰ会話（8名）

*教材等については本年報の「日本語特別コース実施報告」の項参照のこと。

3. ハローパーティーとイングリッシュ・カフェ

岩手大学生とサイス学生との交流の場を提供する目的で、ハローパーティー（アールラム大学主催）とイングリッシュ・カフェ（岩手大学主催）の2度の交流事業が行われた。内容は表1の通りである。

ハローパーティーは出会いを主たる目的としているので使用言語に制限がない。イングリッシュ・カフェは学内の国際教育事業として、国際週間の一環に位置付けて実施した。

*イングリッシュ・カフェの詳細については本年報の「キャンパスの国際化支援事業報告」を参照のこと。

表 1. 事業内容

事業名	日程	参加人数
ハローパーティー	10月7日(木)16:30-18:00	40名
イングリッシュ・カフェ	11月4日(木)16:30-18:00	30名

4. 学内留学

サイス学生は引率教員の専門分野の講義をアールム大学の教育プログラムの一環として英語で受講する。岩大生の英語能力向上に資する為岩手大学とサイスプログラム担当者で協議して、若干名の岩大生がサイスプログラムの引率教員の講義を聴講できることとなり、岩手大学ではこれを「学内留学」と呼んでいる。今年度の概要は表2の通りである。2か月前となる6月に学内留学の参加者募集を行って、参加希望者が各自の時間割に組み込みやすいように配慮した。

表 2. 学内留学概要

開講日程	平成22年8月23日(月)から11月29日(木) 毎週木曜日 13:00-16:00
テーマ	Diversity in Japanese Language and Culture
受講の形態	聴講生として授業に参加し単位は認めないが、成績評価は受ける。
受講条件	十分な英語力と意欲を有する学部生または院生
選抜方法	希望者を英語面接し若干名を選抜

今回は人文社会科学部の2年生1名が受講した。英語力が十分とは言えない状況であったが、担当教員が色々と配慮してくれたので、最後まで受講し成績評価ももらうことができ、学生にとって貴重な体験ができた。

5. 英語による特別講義

サイスプログラムの受け入れ期間中に一度、引率教員は岩大の学生に対して専門分野に関連した特別講義を実施することになっている。今年度から実施した国際週間の一環に位置付けて実施した。

*英語による特別講義については本年報の「キャンパスの国際化支援事業報告」を参照のこと。

(報告: 尾中夏美)

ヤングリーダーズ国際合宿研修 in IWATE

1. プログラム概要

「ヤングリーダーズ国際研修」は、いわて高等教育コンソーシアムに所属する学生たちと、海外学術協定校など、海外の大学に所属する学生たちが、共同作業やフィールドワークなどを通じてグローバルなコミュニケーション能力を高め、多文化理解等に関する実践的な教育の場を提供する研修である。2010年度「ヤングリーダーズ国際研修」では、タイの学生を2名招へいし、岩手大学、盛岡大学の日本人学生6名、留学生（中国）2名とともに、「循環型社会と持続可能性」をテーマに行った。

研修では、まず持続可能な開発という視点から各自のコミュニティーの現状を考察した上で、その後参加者全員で「森と風のがっこう」に向かった。この施設は葛巻にあるNPO法人「岩手子ども環境研究所」が管理しているが、地元の廃校を改修して作られたこの施設は山に囲まれ、持続可能な開発のシンボルとなっている。すなわち、すべての資材が環境負荷を減らすためにリサイクルされ、再生され、修理されている状態となっている。同施設滞在中に、参加学生はエコキャビンに宿泊するなど、循環型エネルギーについて体験するとともに、その基本姿勢について実体験を通して学んだ。この宿泊研修の後、これまでの体験を分析するための討論や各自のコミュニティーで応用できる持続可能な開発のための基準とは何かを探った後、グループは多国籍の2班に分かれて架空都市の環境政策を立案し発表を行った。

2. 実施内容

【期間】

2011年2月11日（金）～2月18日（金）（全8日間）

【スケジュール】

- 2月11日（金） オリエンテーション・アイスブレイク・事前課題発表
- 12日（土） 岩手大学工学部 高木浩一准教授による講義、シミュレーション、グループディスカッション（国立岩手山青少年交流の家）
- 13日（日） 体験活動（葛巻町：森と風のがっこう）
- 14日（月） 体験活動、施設等見学（葛巻町内循環型施設等）
- 15日（火） 中間まとめ（葛巻町：森と風のがっこう）
- 16日（水） 討論、最終課題作成
- 17日（木） 討論、最終課題作成
- 18日（金） 成果報告、クロージングレセプション
- 19日（土） エクスカーション（盛岡市内観光）

【参加者】

<交流協定大学等>

タイ : サイアム大学 2名

<日本人学生>

岩手大学：（中国人留学生）2名、（日本人留学生）4名、盛岡大学：2名

<引率教員>

国際交流センター専任教員 尾中夏美・松岡洋子

【研修内容】

テーマと到達目標：エネルギーの正体と現在の社会が抱える課題を科学的見地から学んだ後、組合を中心とした環境負荷の小さい商品の開発と大都市圏消費者との関係、人々のつながり、教育、環境負荷の小さなエネルギーのあり方など実践例を通じて循環型社会の必須項目を学習し、どのように行動すべきか自立的に考える意識、態度を高める。

成果課題：実験、疑似体験、講義、見学を通じた環境負荷軽減、エネルギーの消費と利便性のバランスのあり方についての討論と理想的なコミュニティ地図の作成

3. 成果

参加学生の中で1名以外は文系学生であり、概念的にしかエネルギーについて知らなかったことから、高木准教授によるエネルギーを具体的に体験しながら、環境負荷の少ない自然エネルギーについて学び世界的なエネルギー問題を考える機会があったのは、参加者全員にとって成果であった。全体として「環境を配慮した政策」が好ましいとわかっているにもかかわらず、具体的に何をどのようにすれば環境負荷を減らせるのか、一時的に「我慢」するのではなく、持続的に対応可能にするには具体的に何が必要なのかを体感し、実施するための観点を討論の中で学習できた。

4. その他

- ・当初計画になかった事業ということもあり、周知のタイミングが遅くなり、参加者が予想以上に少なくなってしまう。また、集中講義や公務員講座など、他の事業と予定が重なる学生も多く、1週間の日程を確保するのは学生にとっても困難なことがわかった。
- ・岩手県立大学（短大部）の学生からも当初参加の意思もあった。（集中講義と重なってしまいキャンセル）
- ・国内留学生の参加が予想以上に少なかった（理由：日程上の問題、テーマに対しての懸念、参加費がかかる）
- ・実施予算は、参加人数が少なかったこと、学生参加費（1万円）を徴収したことから、全体で40万円程度に収めることができた。
- ・教育リソースについて、今回も岩手大学がほぼ全てを持ち出している状態。コンソーシアム事業として継続していく場合には改善の必要がある。
- ・来年度以降は、実施予算の問題やマンパワーの問題もあることから、隔年程度の開催としたい。

（報告：尾中夏美）

海外留学支援事業

海外の大学との学生交流や様々な海外研修プログラムについて学生に関心をもってもらう目的で以下の事業を実施した。

1. 海外留学・研修オリエンテーション

実施日程と参加人数は以下の通りである。

実施日程：5月20日（木） 午後4時30分～午後7時30分

参加人数：80名

オリエンテーションの内容は、表1の通りである。

表1. プログラム

時 間	内 容
16:30～16:45	海外留学・研修の意義と岩手大学での支援体制について
16:45～18:25	ロシア交換留学（全学）
	カナダ語学研修（工学部）
	フランス交換留学（人文社会科学部）
	国際ボランティア・国際エコボランティア（全学）
	米国、カナダ交換留学（全学）
	韓国交換留学（全学）
	アメリカ交換留学（教育学部）
中国交換留学他（教育学部／全学）	
19:00～19:30	海外留学・研修体験者による体験談（フランス：ボルドー第3大学交換留学、カナダ：国際ボランティア&ホームステイ）

2. 留学説明会

全学対象の交換留学申請のための説明会を以下のように実施し10名が参加した。

日程：7月9日（金）

対象となるプログラム：（米国）テキサス大学オースチン校、アーラム大学
（カナダ）セント・メアリーズ大学

今年度は従来より3か月早く実施して、交換留学の申請のための準備期間を長くとれるように工夫したが、今年度は交換留学への志望者はいなかった。

3. 個別留学相談

個別留学相談は学生それぞれで異なる空き時間に個別対応するため、不定期に実施している。相談受付のポスターは常時掲示しているので、希望者は国際課を通すか直接メールで相談時間の予約を入れる。

相談内容は語学研修、交換留学と多岐に渡るが、学生側の情報収集不足がかなり見られる。国際的な

仕事に就きたいという希望はあるものの、具体的な職種が絞れなかったり、準備のために情報を集めるという行動に移れない学生も多いので、カウンセリングを通じて方向性が見えるように手助けをしている。高い語学力を求められる留学に関しては、準備方法などについても具体的に助言している。

表 2. 相談者所属別留学相談のべ件数

年	月	2010 年度											年度合計	
		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2		3
人 社	1年	3	2	2	2									9
	2年								1					1
	3年				1									1
	4年			1			1							2
	院													0
教 育	1年			1	1									2
	2年		2											2
	3年										1		1	2
	4年								1				1	2
	院													0
工 学 部	1年			1						1				2
	2年													0
	3年													0
	4年													0
	院		1											1
農 学 部	1年										1			1
	2年			1										1
	3年													0
	4年													0
	院													0
合計		3	5	6	4	0	1	0	2	1	2	0	2	26

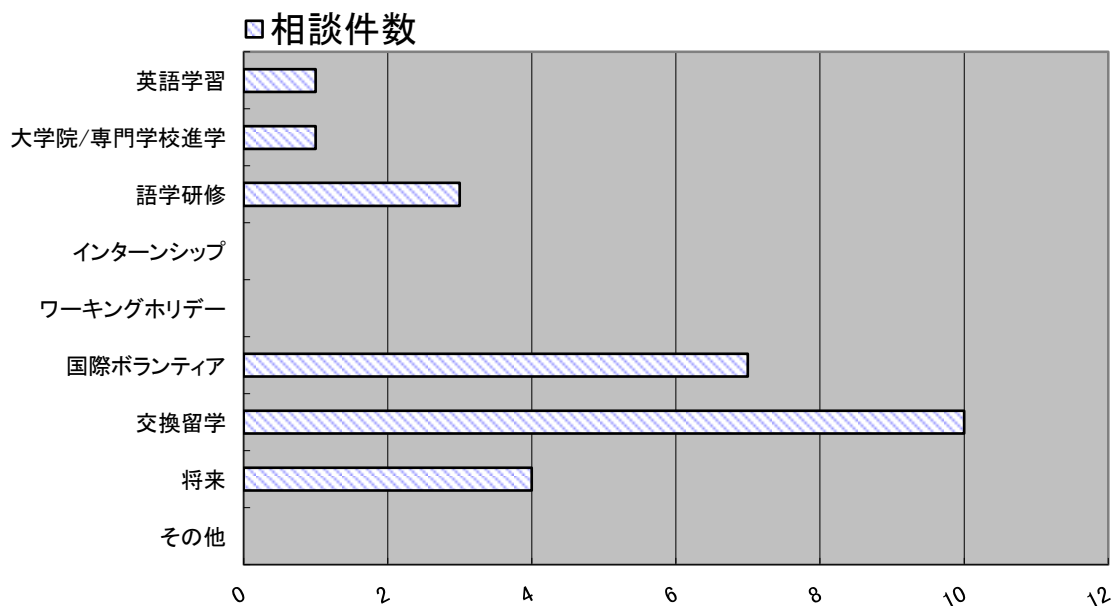


図1 相談内容別件数

4. 国際ボランティア等参加者支援事業

4.1 主旨

平成20年度岩手大学創立50周年記念事業実行委員会奨学金を活用する国際交流事業の一環として、当事業をスタートさせた。この事業ではCIEEが募集する国際ボランティアプロジェクトおよび国際エコボランティアプロジェクト参加者5名程度に1人当たり6万円の支援を行うことで、国際的活動に関心を持つきっかけ作りをしようとするものである。

4.2 事業の経過

昨年度中に13名の候補者全員を面接し、夏休み期間の参加者6名に奨学金を提供した。また、春休み期間の参加学生もあり、審査の結果奨学金受給者を1名追加した。参加学生には帰国後アンケート調査を実施したが、回答を寄せた学生全員が他の学生に「ぜひ参加すべきだと勧める」または「参加した方が良い」のいずれかを選択したことから、体験の充実がうかがえる。

4.3 国際週間での体験発表

奨学金を付与された学生を中心に、さらに参加者の裾野を広げることを目的として体験発表を国際週間に合わせて実施した。詳細は本報告「キャンパスの国際化」を参照されたい。

(報告：尾中夏美)

英語 ICT コンテンツを活用した教育プラットフォーム開発事業報告

1. 事業概要

本事業は、英語による情報収集力とそれを活用して地域の課題を解決する力を持った人材育成を目指し、国内外の協定大学等の教育資源を活用して、英語を使用した多用で継続的な学習を実現する教育プラットフォームを構築する。本事業は、運営費交付金特別経費をもって実施する。

事業実施主体：国際交流センター、大学教育総合センター、情報メディアセンター

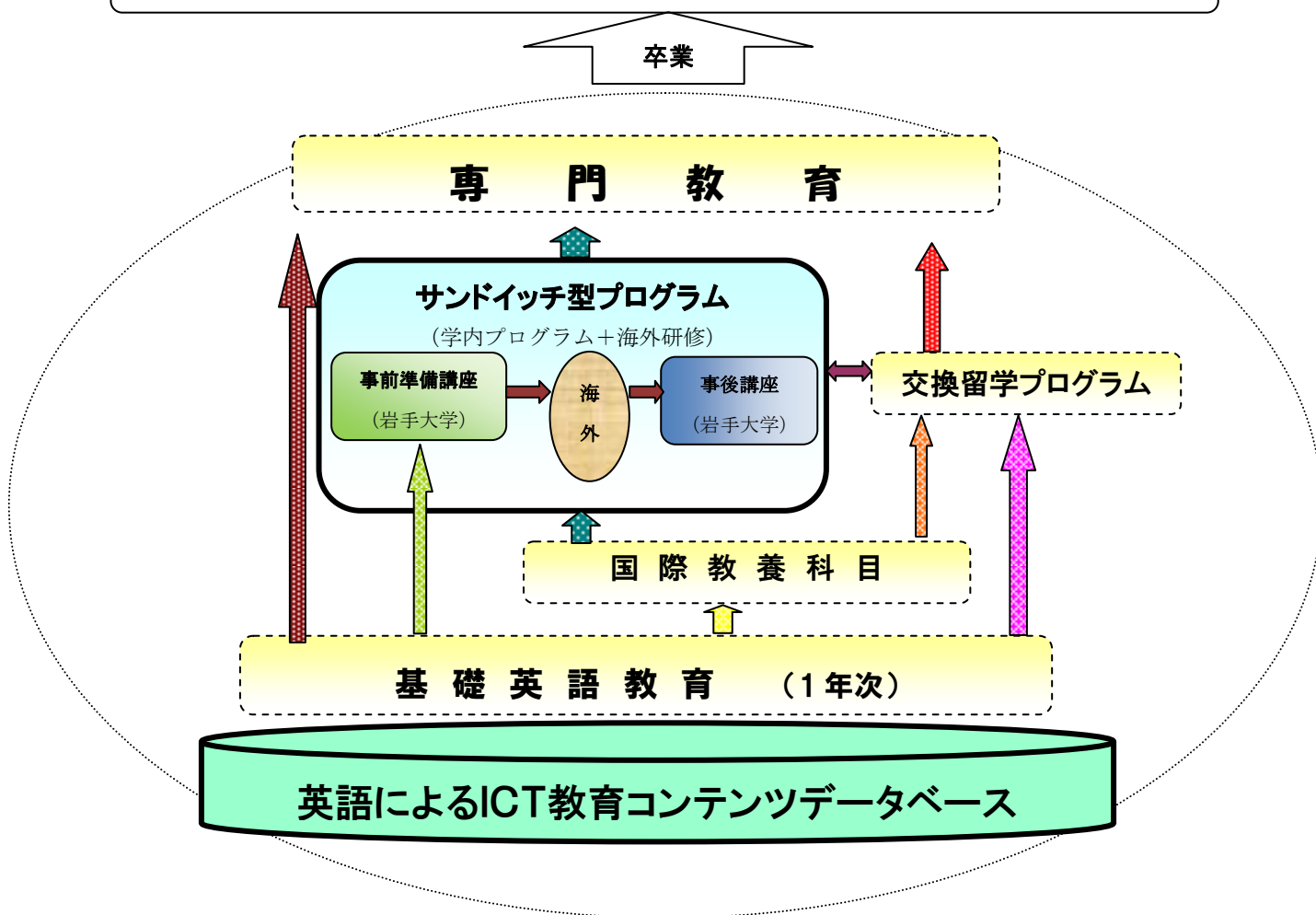
事業計画期間：平成22年度～24年度（3年間）

2. 事業の趣旨

地域課題を国際的な視野から客観的に検討し、持続可能な社会に向けて解決する人材を育成することが日本の高等教育機関の急務となっている。本事業は、教養教育と専門教育を横断して授業や海外研修プログラム、留学プログラムなどで英語を用いた学習を積み重ねることにより、世界で最大の情報媒介語である英語による情報収集力とそれを活用した論理的思考力、行動力を獲得させることが目的である。

英語 ICT コンテンツを活用した教育プラットフォームのイメージ

各分野で英語による情報収集力、課題解決力を有する地域国際人材の輩出



※太線の部分が本事業での実施部分

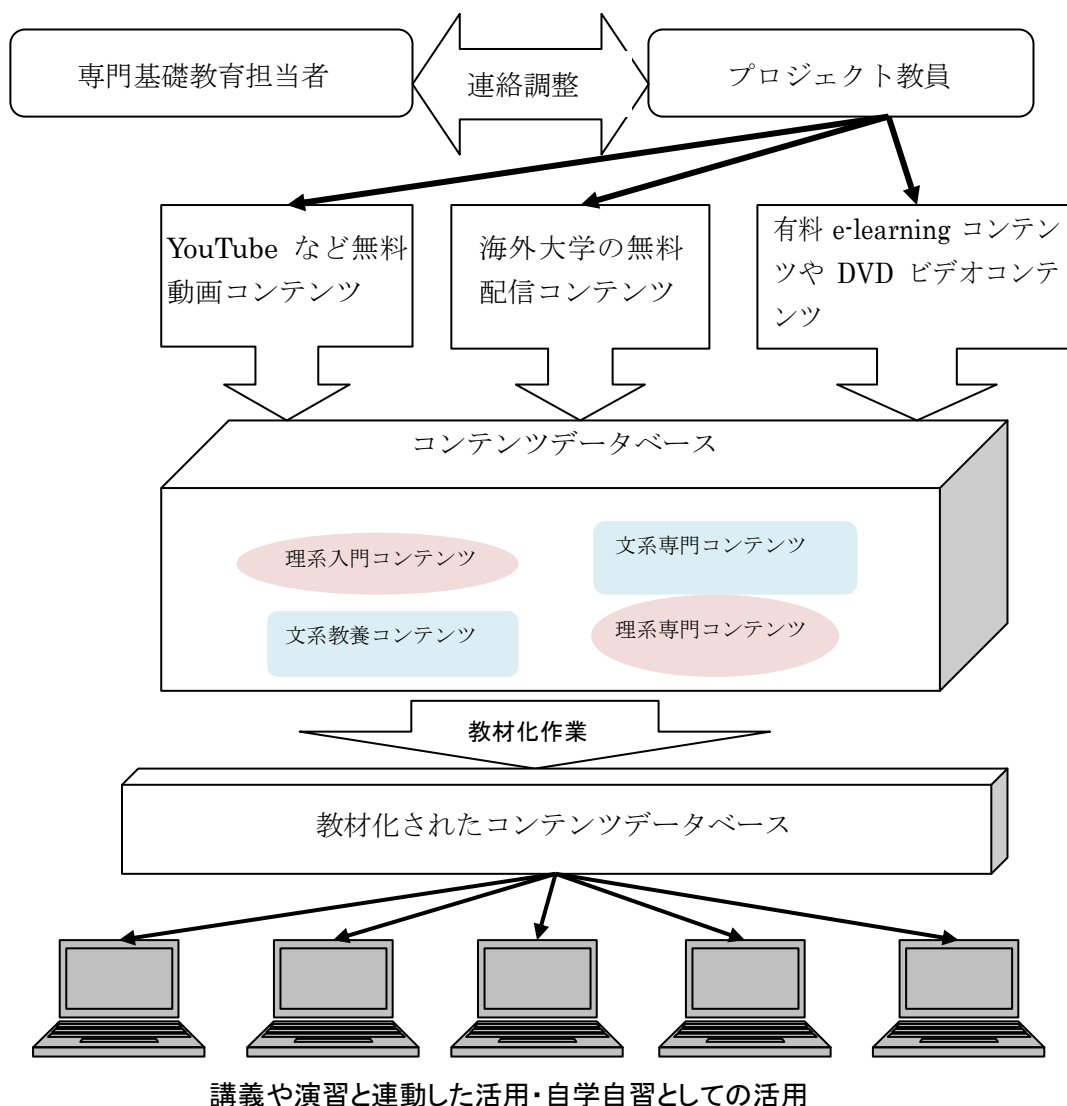
グローバル化した社会においては、岩手県の抱えるさまざまな地域課題の解決にあたっては、英語を活用して国際的視野から課題解決のための情報を幅広く得る必要性が高まっており、そのような能力を持つ人材が不可欠である。しかし、本学では、これまで授業や研究に英語を活用する機会が限られており、英語による情報収集活動などに不慣れな学生が多いのが現状である。本事業では、学内外の資源を活用して英語を媒介とした教育プラットフォームを整備し、英語による教育活動を多様なプログラムにより継続的に展開することを通じ、国際的視野をもって必要な情報を活用する能力を育成する。このような能力を持つ人材を育成することは、岩手の基幹大学である本学の氏名であり、国際社会における持続可能な地域づくりに資するものである。

この3年間で、イメージ図に太枠で示されたサンドイッチ型研修と英語による ICT 教育コンテンツデータベースを構築する。

3. 事業内容

3.1 英語による ICT 教育コンテンツデータベースの整備

本事業では英語ネイティブでオンライン学習の基礎知識を持つ教員をプロジェクト教員として雇用した。教材のデータベースを構築するプラットフォームとしては利便性、費用対効果等から Moodle を使用することとした。全体の流れは以下の通りである。

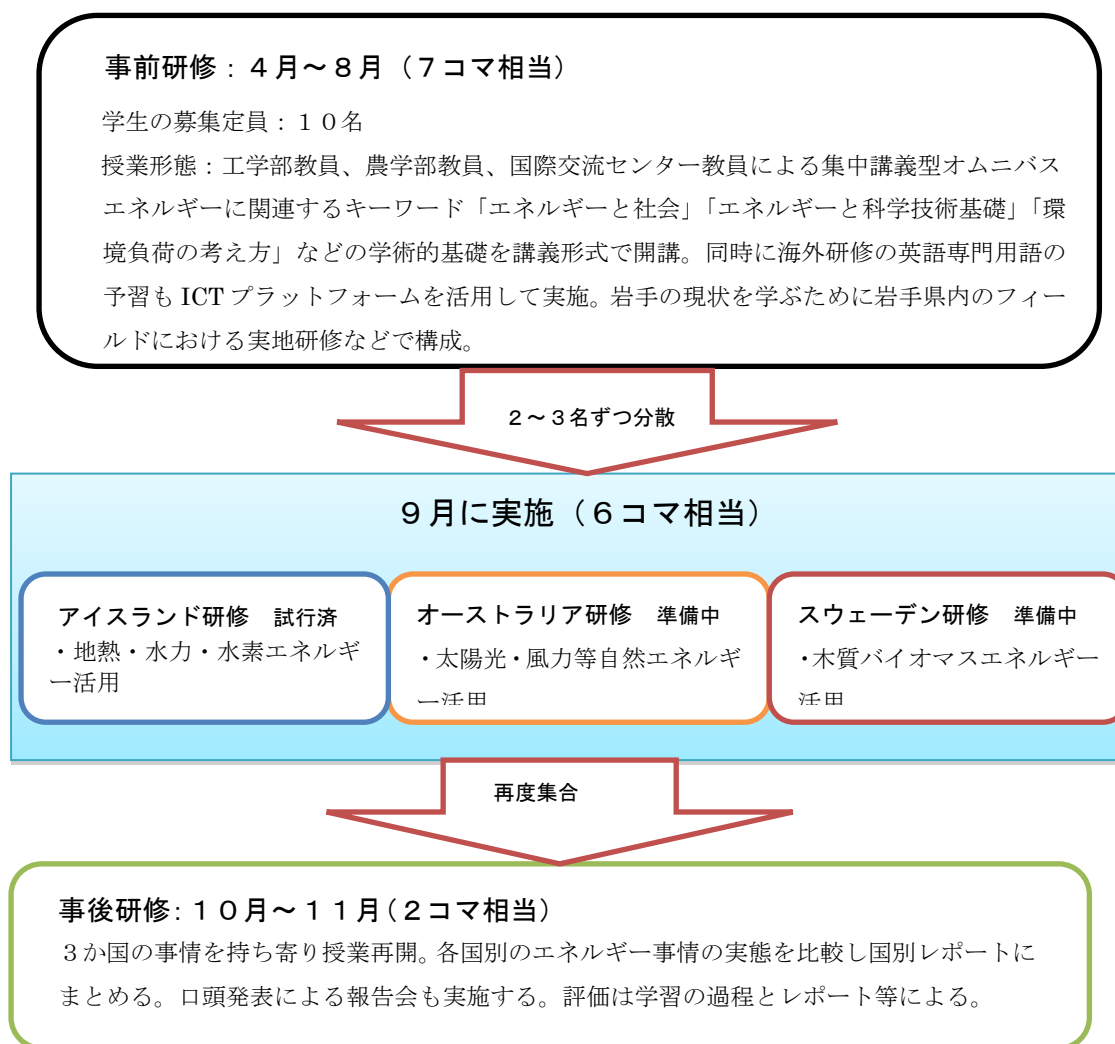


コンテンツは使用したい教員の専門教育分野から、ウェブ上に多くある無料の動画コンテンツや海外の大学が配信しているコンテンツ等を選び、ライセンス問題などをクリアしたのち、これを初級者でも聞き取りやすい短い断片に切り、その各々の断片に正誤問題、穴埋め問題などさまざまな形式の設問をつけて教材化を行う。同時に、教員の使用目的に合うように、教材の一部のみ活用することも可能な形式にしている。

今年度は使用方法を解説するビデオマニュアルを作るとともに、学部等対象の事業説明会および活用方法についてのワークショップも9回開催した。

3.2 サンドイッチ型海外研修

サンドイッチ型海外研修は、持続可能な社会構築のためのエネルギー問題をキーワードに実施する、課題解決型海外研修である。事前研修は集中講義形式でエネルギーを専門とする教員が実施し、英語の支援を国際交流センターが行う。海外研修ではこれを踏まえて、エネルギーの各国事情を少人数グループに分かれて検証に出かける。研修先ではエネルギー関係の会社やプラントの他、受け入れ大学の専門教員による講義も受講する。帰国後は事後研修として、各国での学びを受講学生が情報交換をし、口頭発表および報告書を作成する。



今年度9月には、アイスランド大学において3名の学生が参加した試行を実施した。内容は以下の通り。

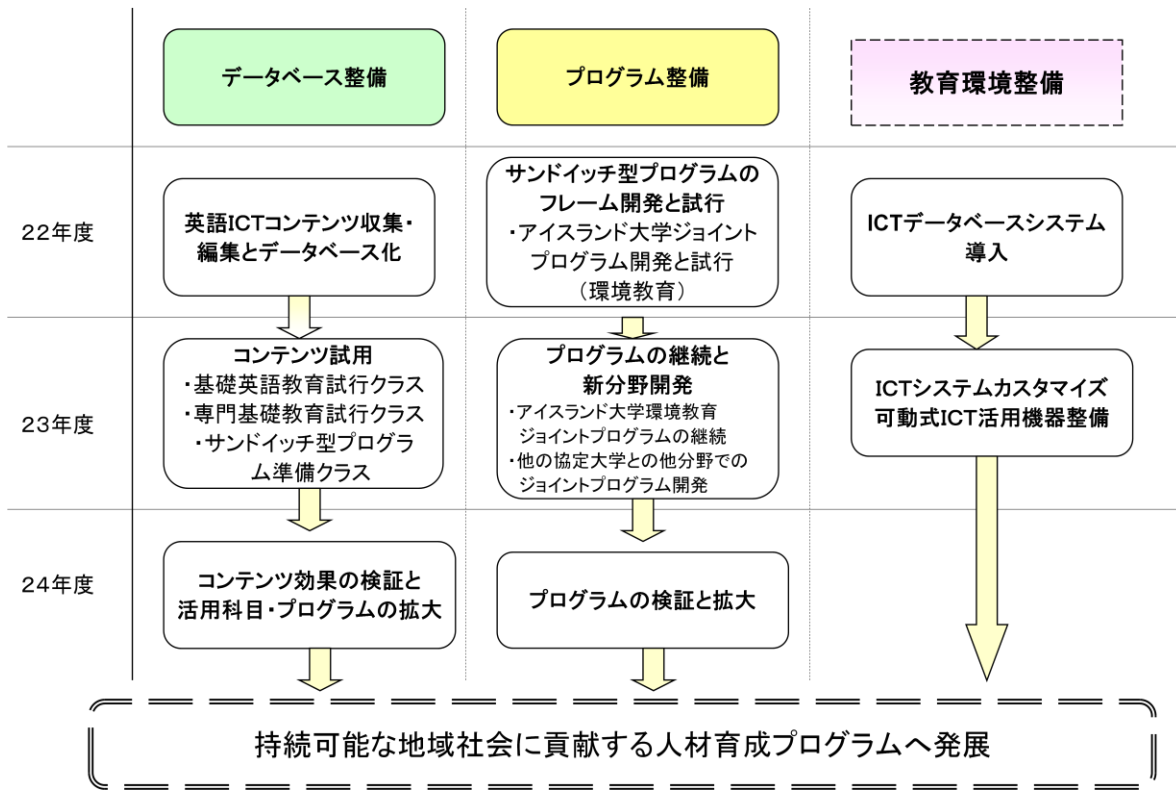
参加者： 参加学生—工学部院生1名、人社学部環境科学課程 4年生1名、 2年生1名
引率教員—工学部教員1名、国際交流センター教員1名

実施内容： 7月27日（火） 第1回オリエンテーション
8月 3日（火） 事前研修<地熱エネルギー>
8月27日（金） インターネットによるアイスランド大学生との交流
8月30日（月） 事前研修<水素エネルギー>
8月31日（火） 出発前最終オリエンテーション
9月 8日（水） 出発
9月 9日（木） アイスランド大キャンパス見学、アイスランド大教員による地熱発電についての講義、アイスランド大生との交流会
9月10日（金） フィールドワーク（地熱公園、地熱発電所、水力発電所、エネルギー教育施設、エネルギー会社での講義、温水給水塔見学）
9月11日（土） アイスランド大生との交流
9月12日（日） アイスランド大生との交流
9月13日（月） フィールドワーク（アイスランドの歴史・遺産・文化に関する視察）
9月14日（火） アイスランド国立博物館件学区、日本語授業見学
9月15日（水） 帰国
10月23日（土）～11月5日（金） 研修体験パネル展示報告

4. 3年間の実施計画

今後3年間の実施計画は以下の通りである。

英語ICTコンテンツを活用した教育プラットフォーム開発



（報告：尾中夏美）

平成 22 年度がんちゃん国際フォーラム開催報告

1. がんちゃん国際フォーラム開催趣旨

本講演会は、国際舞台の一線で活躍する有識者の講演を通じ、本学学生がグローバル化のなかでの地域のあり方を考え、実践する(いわゆる「Think globally, act locally」)きっかけとして、国際的なセンスを磨くことを助けることをもって、本学の目指す持続可能な社会づくりの担い手となる国際理解力のある人材育成に資することを目的としている。

なお、フォーラム名称に岩手大学のイメージキャラクター「がんちゃん」を冠することにより、学生に親しみを感じてもらおうことを狙った。さらに、がんちゃんの角のように国際理解に対する知的好奇心のアンテナを高くかかげ、国際的に通用する情報受信力・発信力を養ってもらいたいという願いを込めている。

2. 開催概要等

2.1 講演会概要

- ・ 名称： 第4回がんちゃん国際フォーラム講演会
- ・ 主催： 岩手大学国際交流センター
- ・ 開催日時： 平成 22 年 11 月 12 日(金) 14:45～16:15 (90分) (14:15 開場)
- ・ 開催場所： 岩手大学 総合教育研究棟(教育系) 2F 北桐ホール
- ・ 講演者： 坂場 三男 前駐ベトナム特命全権大使、現在外務省特命全権大使(イラク復興支援等調整担当兼気候変動枠組条約第 16 回締結国会議(COP16)担当)
- ・ 講演テーマ： グローバル化の中の国際理解「明暗を分ける日越関係と気候変動問題」
- ・ 対象者： 学生、教職員及び一般市民、参加者約 150 名

なお、講演会終了後の 16:30～17:00 に坂場大使と学生ら参加者とのトークセッションを実施した。

2.2 PR 及び関係機関への周知等

PR のため、学内に本講演会ポスターを掲示するとともに、学生向け PR チラシを作成し、関連する分野の教員を通じ学生への配布を依頼した(ポスター等は学内印刷機で作成することにより、経費節約に努めた)。また、岩手大学ホームページの「イベント情報」掲載及び報道機関へのプレスリリースを行った。併せて、県内関係機関(岩手県、岩手県国際交流協会、いわて高等教育コンソーシアム、JETRO 盛岡マーキング)へ周知を行った。

3. 実施報告

3.1 講演の概要

坂場大使は平成 22 年 9 月まで 2 年半にわたり駐ベトナム特命全権大使を勤めた経験から、ベトナムと隣国との歴史的背景を踏まえつつ、同国での日本の ODA 事業の実情を紹介するとともに、日越・戦略的パートナーシップの意義について説明を行った。

また、講演の後半には、京都議定書の採択からこれまでの流れ、平成 22 年 11 月下旬からメキシコで開催される COP16 の展望等の説明がなされた。

最後に、外交の現場での経験を通じ、対ベトナムのような二国間関係においては、信頼関係の構築とともに重要な局面での決断力が必要であるのに対し、COP16 のようなマルチ外交においては、外国語での雄弁さ、構想力、根気強さが試されるとしたうえで、日本の国益を踏まえての外交のあり方が学生に

提示された。

また、フォーラム終了後は、坂場大使と学生ら参加者との間でトークセッションを開催、冒頭ベトナム留学生のグエンティンギアさんがベトナムの人々の暮らしぶりについて写真を交えながら紹介し、つぎに環境マネジメント学生委員会委員長西郷優さん・副委員長佐藤史子さんが、岩手大学の環境マネジメントの取組みについて紹介した。初めは緊張していた学生も坂場大使の気さくな人柄に触れて和やかな懇談となった。



講演する坂場三男大使

3.2. 参加者数及びアンケート回答者

参加者数約 150 名

アンケート回答者数 87 名 (回収率 58%)

3.3 アンケート集計結果

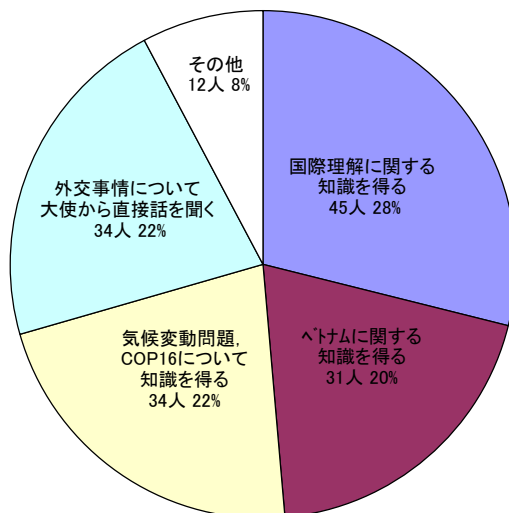
(1) フォーラムの満足度

満足と答えた人 81 人 (回答者の 97.6% (無回答除く))



講演会会場

(2) フォーラムの参加目的(複数回答)



トークセッション

(3) 感想など自由回答(抜粋)

- ・ (学生) 普段あまり触れられない「ベトナム」という国について触れる良い機会になった。
- ・ (学生) 日常で深く関わる機会がないため、ベトナムの話を知ることができとても参考になった。体験談からの話はとても説得力があり、分かりやすいと感じた。
- ・ (学生) 実際に大使として活動してきた経験を聞くことができ、中身のある、充実した講演でした。
- ・ (学生) ベトナムのことだけでなく、国際社会についても知ることができ、とても勉強になった。
- ・ (学生) ベトナムについてのいろいろな面に関して知ることができ、とても勉強になった。
- ・ (学生) ベトナムという国だけでなく、米・中・ヨーロッパなどの国の思想も分かってとてもおもしろかった。
- ・ (学生) ベトナムに関する知識がほとんどなかったので、今回の講演でベトナムについて少しでも知ることができて良かった。特に、日本の ODA 事業でベトナムに対して様々なことをしていたことを

知ることができた。また、外交の難しさや二国間外交とマルチ外交の違いなども知れて良かった。気候変動問題についても、会議などが思ったよりも難しいものであると感じた。

- (学生) 二国間外交と多国間外交の違いをお聞きして、二国間でじっくり話をして、距離を縮めることは大切なことだと感じました。
- (学生) 最後まで飽きずに興味を持つことができるおもしろい内容でした。COP について良く分かりました。
- (学生) ベトナムの現状や、外交の難しさが理解でき、とてもためになった。
- (学生) 普段聞くことのできない世界的な話を聞くことができ、とても興味深かった。気象関連の話は、本当に難しい問題であると思った。
- (学生) ベトナムの文化的な面で日本文化が受け入れられているとは意外であった。また、最初は難しい話をされるのかと予想していたが、聞きやすかったので参加して良かったと思った。
- (学生) ベトナムの地名については、以前から知っていたので、日本がベトナムに対して行った ODA の内容など、興味深く聞くことができました。私は国際文化課程に所属しているので、今回のようにベトナムを始め世界の国々の関係のお話ができ嬉しく思います。京都議定書によって離れてしまった中国やアメリカも引き込まれるような環境保全の構想を、COP という世界の場でいち早く打ち立てていくべきだと思います。今回の講義で視野を広げられたと思うので、今後も参加していきたいです。
- (学生) 気候変動問題と、それに対する各国の考え方について知ることができた。また、外交において、人柄や語学力がとても大切であることが分かった。
- (学生) ベトナムについて知る機会があまりなかったので、今回の話は、情報源にもなったし、面白いと思いました。
- (学生) つい最近までベトナムにいらっしゃった生の外国の実情を聞くことができ、よかった。日本との宗教観や思想の違いはおもしろかった。はじめは外国に関する知識を得られればと思って参加したのだが、外交事情についても興味深い話を聞けて良かったです。
- (学生) 日本の外交の最先端にいる人の話を聞くことができ、リアルな世界の姿を感じることができた。
- (学生) ベトナム以外の国と日本の関係についても知りたくなった。
- (学生) リアルな考え方を聴くことができよかったです。理論、考えなどではなく、実際に活動している「生きた意見」を聴き、考えさせられました。
- (学生) リアルタイムで、現場におられる方の生のお話をお聞きすることができ、大変感動しました。大学で学んだことが実際の世界で起きていることを感じられました。次回もぜひ参加したいです。ありがとうございました。
- (学生 (留学生)) 授業で聞けないことを聞けて良かったです。
- (学生 (留学生)) いろいろ勉強になりました。そして、もっともっと聞きたいです。
- (学生 (留学生)) 坂場大使の今の国際気候変動についての講演を聞いて、凄く良かったと思います！世界環境保護への参加、努力は私たち一般人だけではなく、各国の政治家や役人も様々なやり取りをしている事が自分の耳で確認できました！
- (教職員) 楽しく講師の先生のお話を拝聴でき、その後のフリーディスカッションタイムにも参加させていただきました。次回はまた別のアジアの国の日本大使の方のご講演をお聞きできればと思います。
- (市民) とても良い企画なので継続してほしい。

(早川智津子 国際交流センター)

平成22年度岩手大学外国人留学生スキー研修実施報告

1. 目的：岩手大学に学ぶ外国人留学生が、母国で経験することの少ないスキーを通じて、雪国である岩手の冬に親しむ。更に、留学生相互、並びに教職員との交流を図り、留學生活の適応と留学生教育の効果を高めることを目的とする。
2. 期 日：平成23年1月5日（水）～1月7日（金）（2泊3日）
3. 実施・宿泊場所：安比高原スキー場・安比グランドホテル
 - 1日目 盛岡→安比高原スキー場 午後研修
 - 2日目 安比高原スキー場 終日研修
 - 3日目 安比高原スキー場→盛岡 午前研修
4. 参加人員：留学生 37名
 - 内訳) 人文社会科学部・研究科 9名
 - 教育学部・研究科 14名
 - 工学部・研究科 9名
 - 農学研究科 3名
 - 連合農学研究科 2名引率 国際交流センター准教授 早川智津子
国際課職員 岩野、佐藤

研修2日目、3日目は風雪が非常に強く、学生にとっては疲れやすい天候であったため、数名研修を休んだ者がいたが、全体として怪我や病気等もなく、予定通り実施することができた。

参加者の半数以上がスキー初体験だったが、皆上達が早く、「とても楽しい」、「帰りたくない」という者が大半を占め、スキー研修を通じて留学生同士の交流も図られ、十分に目的を達成することができた。

平成22年度岩手大学留学生実地見学旅行実施報告

1. 目的：岩手大学に学ぶ留学生に対する教育活動の一環として、我が国の現状を実際に見学し、留学生の日本に対する視野を広げるとともに、留学生相互の交流によって今後の学習面及び生活面の充実に寄与することを目的とする。

2. 期 日：平成22年9月7日（火）～9月9日（木）2泊3日

3. 旅行先及び見学場所：北海道

第1日目 函館ベイエリア・函館明治館・金森赤煉瓦倉庫群
函館市北洋資料館・五稜郭・函館山等（ホテル泊）

第2日目 昭和新山・白老アイヌ民族博物館・北海道大学植物園・札幌市内
苫小牧～（船中泊）

第3日目 ～八戸港 大学着
旅程別紙参照

4. 参加予定人員：留学生 40名

内訳）	人文社会科学部・研究科	7名
	教育学部・研究科	16名
	工学部・研究科	10名
	農学部・研究科	4名
	連合農学研究科	2名
	国際交流センター	1名

引率（国際交流センター）岡崎正道教授、（国際課）岩野、佐藤

目的地に向かう車中で、引率教員より資料に基づき見学先に関する説明がなされ、各見学場所では、教員やガイドからさらに詳しい説明を聞き、実際に見学することで日本の歴史や文化への理解を深めた。

また、岩手大学の外国人留学生といっても面識のない参加者も多く、3日間行動を共にすることで相互の交流が図れ、留学生からも、参加して良かったとの声が多かった。今後の学習面や生活面の充実に繋がるものと期待できる。

平成22年度 学長と岩手大学外国人留学生の懇談会

日 時 : 平成23年3月11日(金) 13:30~15:00

場 所 : 学生センターB棟1階多目的室

参加者 : (教職員)

藤井克己学長、岩淵明理事・副学長、玉真之介理事・副学長、大野眞男国際交流センター長、尾中夏美准教授(司会)、早川智津子准教授、中島武幸研究交流部長、山中和之学務部長、大内正キャリア支援課長、上杉明国際課長、国際課職員(外国人留学生)

全 度炫(ジョン ドヒョン、韓国、人文社会科学部)

郭 亜紅(カク アコウ、中国、教育学研究科)

VU THI THU HUONG(ヴー ティ トゥー フーン、ベトナム、工学部)

PURWOKO HARI KUNCORO(プリウオコ ハリ クンコロ、インドネシア、農学研究科)

李 積軍(リ ジジュン、中国、連合農学研究科)

- 次 第 :
1. 開会
 2. 出席者紹介
 3. 学長挨拶
 4. 懇談
 5. 閉会

テーマ : 岩手大学への提言 ～卒業後の進路を中心に～

内 容 : 参加留学生に事前に岩手大学に対する通信簿をつけてもらい、施設・設備面、学習面、国際交流センター、経済・生活面、入学の動機、卒業後の進路等について、それぞれに沿って意見が述べられた。学内のパソコンの設置状況が良いことや、授業料免除が適用され経済的に助かっていることなどのほか、留学生にとって日本語で論文を作成するのが非常に大変で、サポートをする人が必要であるという意見があった。卒業後の進路について、将来は母国に戻り仕事をしたい、母国と関わりのある日本の企業に就職したいなどの希望が述べられた。和やかな雰囲気ではあったが、懇談会中に東日本大震災があり、途中ではあったが閉会することとなった。



挨拶する藤井学長



意見を述べる外国人留学生

国際交流センターによる大学広報活動報告

1. 海外でのPR活動と情報収集の意義

ここ数年連続して日本留学フェアに参加してきたことから、大学名を知る受験希望者が若干増えてきたように感じられる。毎年フェアに来ている学生とは顔見知りの者もあり、親しみを感じてくれる。また、東京で行われる進学説明会で岩手大学の情報を集めにくる学生も見られることから、今後はさらに留学フェアと進学説明会の連動など、投資効果を向上させることが課題と言える。

2. タイ訪問

2.1 日本留学フェア

教員1名、事務職員2名で参加した。今回も本学を卒業した元留学生に両会場で通訳をしてもらった。資料は学科の詳しい内容をタイ語に翻訳した冊子で準備した。会場には元研修生や短期プログラムの参加者、卒業生などが訪問してくれ、小さな同窓会のような雰囲気があった。

来訪者から寄せられた質問は、英語による授業の有無、アニメ研究について、奨学金についてなどが多かった。使用した資料の金額や年号の掲載方法が利用者のニーズとずれているように感じられたので、今後の改善が必要である。

開催日程	チェンマイ:11月25日(木)、バンコク:27日(土)
開催場所	チェンマイ:チェンマイ・オーキッドホテル バンコク:S31 スクンヴィット・ホテル・バンコク
フェア全体の来場者数	チェンマイ:451名 バンコク:1228名
岩手大学ブースへの来訪者数	チェンマイ:72名 バンコク:92名

2.2 大学訪問

サイアム大学訪問

以前短期プログラムで岩手大学を訪問したことのある教員、事務担当者各1名と面談し、今後の短期プログラムによる交流について協議した。サイアム大学でも助成金を申請中の事業があるということで、今後も緊密な連絡を取り合うことを確認した。

3. ベトナム訪問

3.1 日本留学フェア

教員1名、職員2名が参加したほか、工学部のベトナム人留学生2名が参加し、ハノイ、ホーチミン両会場においてベトナム語で自らの留学経験を紹介するなどの対応をしてもらい、本学に対する来場者の関心を高めることができた。

ハノイでは、昨年度より大学院入学志望者の相談が多く、特に人文社会科学研究科(主に経済・金融関係)を志望する者が多かった。また、全体的に工学部(大学院)志望者も比較的多く、機械工学・電子電気・情報など、専門分野での受入れ相談があった。また、ホーチミンでは、ドンズー日本語学校の生徒が多数来場しており、3月から盛岡に来る予定だという者もいた。

開催日程	ハノイ:11月20日(土)、ホーチミン:21日(日)
開催場所	ハノイ:メリア・ハノイホテル ホーチミン:ホテルエクアトリアル
来場者数	ハノイ:618名 ホーチミン:601名
岩手大学ブースへの来訪者数	ハノイ:46名 ホーチミン:43名

4. 北米訪問

4.1 NAFSA(米国国際教育学会)

今年度はカンザスシティコンベンションセンターを会場に、6月1日から4日の期日で実施された。本学からは教員2名が参加し、協定大学の参加者との打ち合わせ等を行うとともに、国際教育関連の情報収集を行った。

4.2 協定大学等訪問

NAFSA 会期前に協定大学であるアラム大学と教材作成の協力校であるカナダのヨーク大学への訪問を実施し、現在特別運営費交付金事業として実施中の事業に関連した教材開発への協力を要請した。

5. 進学説明会

7月11日(日)、日本学生支援機構(JASSO)主催の「2010年外国人学生のための進学説明会」(会場:サンシャインシティ文化会館2F展示ホールD)に、教員2名、職員2名で参加した。

本進学説明会には、135機関(国立50大学、公立3大学、私立79大学、短期大学1大学、その他2機関)が参加し、総入場者数は3984人であった(H19年度2548人、H20年度2030人、H21年度2546人)。

岩手大学ブースを訪問した学ぶ外国人相談者(記帳者のみ)は以下のとおり(そのほか、日本語学校等関係者4名の来訪があった)。

① 総計: 105名(H17年16名、H18年43名、H19年39名、H20年44名、H21年49名)

② 国別: 中国(81名、うち台湾3名)、ベトナム(11名)、マレーシア(7名)、韓国(4名)、モンゴル(1名)、サウジアラビア(1名)

③ 学部別:

	学部(関心のある分野)	大学院(関心のある分野)
人文社会科学部 (45名)	心理学、社会学、経済学、経営学、環境、文学、日本語、日本文化、語学(英語やフランス語)	6名: 経済、経営学、法学、日本語
教育学部(16名)	教育学、芸術(デザイン、映画、CG、アニメ)	2名: 芸術
工学部(35名)	電気電子、情報工学・メディア、建築・土木建築、生命工学、機械、材料物性	6名: 情報工学、機械、土木建設
農学部(5名)	動物科学	3名: 獣医学、医学生物

④ 主な相談事項

大学概要	岩手大学の位置、岩手の位置、盛岡駅からの距離、周辺環境、就職状況について
入試について	入試日程、科目、手続きについて、日本留学試験のボーダーライン、入試に英語成績(TOEFLなど)が必要かどうか、私費留学生入試の合格者割合、教育・生涯のスポーツコースの実技試験について、人文社会科学部の小論文試験のテーマ
研究生について	
納付金	授業料、入学料の額、及び減額、免除について免除される割合
奨学金について	奨学金の種類、受給者数について
生活状況	生活費、アルバイトはしやすい環境か?
宿舎について	入居状況、家賃など
その他の質問事項	盛岡の気候について、日本語の授業が受けられるかどうか

⑤ 全体的な感想

- ・昨年度同様に今年度も PC を持ち込み、インターネットを使用できる環境を導入した。インターネットを使用して説明する事は少なかったが、大学院入試に関する情報や国際交流センターの多言語ホームページを紹介するのに役立った。
- ・「OUTLINE of Iwate University for International Students」の生活情報（在学する外国人留学生の生活費やその内訳）が役に立った。
- ・大学の場所や入試のレベルなど基礎的な質問が非常に多かった。特に日本留学試験の得点率に関する質問が多かった。「国立大学は入るのが難しい」という意識が多くのある学生に多かった。また、岩手大学の入試には英語成績（TOEFL など）が不要であることに好感を持つ学生が多かったので、このことを宣伝していくのも良いのではと感じた。
- ・やはりアジアからの学生が多く質問に来てくれた。中国人の学生の来訪者が3倍くらいになり、またベトナム人学生も少し増えた。ベトナム人学生の中には、友人（日本語学校の先輩OBなど）から岩手や岩手大学を勧められたとの話が数件あった。ベトナム人にベトナム語で書かれた Outline を渡すととても喜んでくれた。
- ・大学が駅やメインストリートに近いこと、また全ての学部が1つのキャンパスにあることや街の中心部にありながら自然が多いこと、生活費が東京に比べて安いことを説明すると、好感を抱いてくれる者が多かった。
- ・大学院入学を考えている学生が多く、大学院入試や研究生に関する情報を手持ち資料としてあった方が良かった。
- ・岩手大学ネーム入りのボールペンやがんちゃんストラップを活用できたことで、宣伝になっただけでなく、岩手大学自体に興味を持ってもらえるきっかけになったと思う。
- ・のぼりや椅子などブースの装飾は、もっとインパクトのあるもの、かつ、扱いやすいものにしていく等、今後も検討の必要があると思われる。

（報 告：尾中夏美・早川智津子）



Iwate University International Center